

# インテンシブ英語試論〔3〕

授業の演出——やさしい英語教授法——

## A Strategy for the Classroom English

治 田 耕 吉

### はじめに

「インテンシブ英語試論」の第一稿においては、「日本人と外国語学習」と題し、昭和59年4月開設された相愛大学人文学部「英米文化学科」の第一年次の授業構造（カリキュラム）の上に、その配置が成った外国語学習の目標、学科の設立理念、今日的意味とその具体的な展開の方法を顕し、さらに日本人が外国語を学習する上での意味と問題点を検討した。第二稿は「授業構造を支えるもの——Motivation と自己教育力」と題し、本科生が第一年次に集中的に学習する「インテンシブ英語」のカリキュラム上、本稿の執筆者自らが担当した Audio（リスニング）・Compo（英作文）の授業を展開する上で留意した広義の学習心理と、学習者を取り巻く学校社会の公状況に自らの関心を持続させながら、本課程の目標の達成条件は、学習者が本来的に内在すべき‘Motivation と自己教育力’の中に見出し得るものと断じ、その指導措置を顕したものであった。本稿は、初学者あるいは学習遅進者を含む多様な学力を有する学習者を対象として、教授法上留意すべき視点と可能性を‘授業の演出’と題し、授業展開の上に具体化した授業実践の報告集であり、執筆者の英語教授法の基本的な態度および要件（essentials）を顕したものである。

### Ⅱ 教授法の視点

何を、どのように教えるか。

言葉（ことば）は音声であると言われ、言語活動の本来の姿が音声をメディアとする発信と送信の機能に存するところから、音声言語を第一義にして、文字を介する文字言語は、その代用品にすぎず、したがって外国語学習においてもその音声面の優位を強調する立場がある。しかし、成人してはじめる外国語学習は勿論のこと、総じて日本人が英語を第1

外国語として学習する場合においては、日本語とはその言語体系を異にする外国語としての英語が備えている‘一般性を有する習慣’、つまりその法則性を系統的に学習することは、時間の経済効果の観点からも学習方法として、きわめて効率が高いと言える。文法学習は、このような言語の運用にあたっての種々の習慣を系統的に研究することを目的とするが、他方英文法の諸関係を指示する日本語による文法用語は総じて難解であり、初学者はもちろん一般の学習者が英語という科目に対して‘苦手’意識をもつのは、ひとつには日本語で教授する際に使用される文法用語に起因するのではないかと考える。

英語という言語は、ある一定の文法的諸関係、つまり文の構造・語順・他の統語法を理解すると、日本語に比べてはるかに論理的であり、言語の枠組みがしっかりしていること、少なくとも視覚的に捉えやすい言語である。したがって英語を教授する際には、英語の‘学びやすいところ’を強調して、‘英語は難しい’という先入観をいだかせないように、教授法上きめこまやかな創意工夫をすることが肝要である。そのひとつの視点は、英語を教授するにあたっては、英文中に登場する統語的關係、つまり文法内容をそれぞれ個別的に取り出して教授するのではなくて、英語の文章構造の全体的枠組みの中で、できるだけ包括的に取り上げるべきこと、とりわけ学習者にとって理解しにくいと考えられる教授内容について、取り上げる項目を精選し、その精選された教授内容を相互に連関性をもたせながら、できるだけ英文全体の枠組みの中で単純化し、図式化し、反覆して教授することが有益である。さらに本稿の立場においては、学習活動に対する‘興味づけ’と学習内容の定着性の二点を、授業を展開する上での大前提として、言語指導面の教授者の効果的な演技・演出力を重視する立場をとるのである。その教授法の特色あるいは構成要件は以下に列記するとおりである。

#### 〈構成要件〉

- 1) 授業の準備——計画性とシラバスの存在
- 2) 学習目標の明示——学習計画表の作成
- 3) 授業展開の一貫性——授業の起点と帰結・‘メリハリ’のある授業展開
- 4) 教授内容の精選と包括的指導——重点項目化と相互の連関性に留意する。
- 5) 視覚的構造的アプローチ——文法事項の図解 (A Visual Approach to the English Grammar)
- 6) 学習内容の定着性の重視——演習作業の重視・テスト・評価
- 7) ‘Priority’ (最優先事項) としての Motivation (動機づけ)
- 8) 初学者および学習遅進者へのアプローチ——学力保障観
- 9) 授業時間の多段階利用——効率のよい、多様な授業展開
- 10) 視聴覚教材・教具の広範な活用——An Audio-Visual Approach と興味づけ (Motivation)

- 11) テープの利用——テープ・トレーニングにもとづく速読法と聴解
- 12) 日英両語の比較——対照言語学の立場からの英語学習
- 13) 外来語の取り扱い——英語学習と外来語・その意義
- 14) 短期速習法——完結した内容をもつ授業展開
- 15) 音声指導——‘英語音’をつくる（母音と子音）
- 16) 音読の重視——音読カードの設置
- 17) 聴解技能（Listening Comprehension）の重視——L.L.カードの設置

## ② やさしい英語教授法

### (1) 文型と語順 (Sentence Patterns & Word Order)

- 文の基本形式 (Types of Sentences): 英文は、その形式の上から——動詞の機能を中心として——次の五種に分類する。〈その展開例は、つぎの板書法と重複するので省略する。〉

●板書法の展開例(1)文型について——左記の例示から右へと順次配列し、視覚的な解説の仕方を工夫する。

(1)	(2)		
1) S + <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">V</span>	——	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">S + V</span>	S + V
2) S + <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">V</span> + O	——	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">S + V</span> + C	S + V + <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">C</span> <sub>(5)</sub>
3) S + <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">V</span> + O	——	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">S + V</span> + O	S + V + O
4) S + <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">V</span> + O + O	——	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">S + V</span> + O + O	S + V + O + O
5) S + <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">V</span> + O + C	——	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">S + V</span> + O + C	S + V + O + <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">C</span> <sub>(6)</sub>

1) 文の種類(五文型の存在)と分化の誘因としての動詞(V)の性格(意味・内容)についての解説。	2) 文(Sentence)の成立と文の主要素(S・V)の存在とその位置についての解説。	3) O = 目的語 4) O ≠ O (間接目的語・直接目的語) 一つあるいは二つの目的語の必要について自動詞と他動詞の存在・性格上の差異から解説する。	5) S = C (主格補語) 6) O = C (目的格補語) 2つの補語の存在と相異について、完全動詞と不完全動詞の存在・性格上の差異から解説する。
--	--	---	--

●板書法の展開例(2)英文について——動詞を中心にして文型の分化の過程を解説する。

1) S + V	——	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">Birds fly.</span>	——	第一文型の自ら完結した内容をもつ完全動詞の性格を指摘する。
2) S + V + C (S = C)	——	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">He is Tom.</span> (He = Tom)	——	第二文型の自ら完結した内容をもたない動詞が、繋辞としての機能をもつことを指摘する。
3) S + V + O	——	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">We eat apples.</span>	——	第三文型の自ら完結した内容をもつ完全動詞が他動詞の性格を備えていることを指摘する。
4) S + V + O + O (O ≠ O)	——	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">Tom gave me a pen.</span>	——	上と同じ性格を備え、文意を完成する上で二つの目的語を必要とすることを指摘する。
5) S + V + O + C (O ≠ C)	——	<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">She made me happy.</span> (me = happy)	——	第五文型の他動詞の性格とあわせて、自ら完結した内容をもたず、文意を完成する上で補語を必要とすることを指摘する。

教授内容	説明事項	ポイント
1) 文の構成について:	① 主部・主語(S)／述部・述語(V)について ② 動詞(V)について ③ 補語(C)・目的語(O)について ④ 語順(Word Order)について ⑤ +M(修飾語句)〈形・副〉について	完結した思想内容をもつ‘文’のなかでの主要素としての主部(主語)・述部(述語)の機能。 〈完全動詞・不完全動詞〉／〈自動詞・他動詞〉と称される動詞の性格上の差異。 動詞(V)の性格の差異が原因となって、補語や目的語を必要とすることを指摘する。 英語では語順が大事。 文の従要素としての修飾語句〈形容詞・副詞・その相当語句〉も、やはり大事。
2) 語順について:	① 1 正常の語順(S + V) ② 逆の語順(倒置) (V + S／AV + S + V)	語順・(叙述)動詞の位置について、日英両語の根本的相異、比較対照。 文意のリズム・強調・前後のバランスなどが原因となって、必要上語順が倒置することがあることを指摘する。〈語順の倒置・Inversion〉

英文の基本的な文章構造を示す「五文型」〈Sentence Patterns〉と語順 〈Word Order〉についての本稿の教授法上の留意事項は、殊更に新しい視点を備えるものではない。まず、総ての文型をそれぞれ表す例文を提示の上、五文型全体についての説明を‘同時進行’させ、その解説を簡述し、かつその直後の演習作業を通じて学習内容の定着性に留意する。  
 〈演習ペーパーの事前の用意〉

- 要点 1) 目標の明示——まず‘文’と呼ばれるものの概念を、ついでその全体を構成する主部(主語)・述部(述語動詞)の存在(区分)を簡述する。
- 2) 文型の成立——英語の五文型の成立と分化を、‘動詞’を主誘因(=仕掛人)として説明すべきこと。
- 3) 包括的理解——「五文型」をそれぞれ表す立体的な構図のなかで例示し、学習者の包括的視覚的把握をはかるべきこと。
- 4) 第五文型——なかでも第五文型(S + V + O + C)は、学習者のもっとも理解しにくい文構造であることに十分留意し、文中の補語(=目的格補語)についての‘補語のいろいろ’を豊富な用例の提示をもって解説し、やはり事前に用意された演習用ペーパーを通じて学習者の理解の定着をはかること。

英文の総ての文型を表す、やさしい英文の並列的な例示をおこない、それぞれの文中に含まれる動詞の性格の差異を指摘し、それが原因となって、英文の五つのスタイルが発生すること、例えば、動詞の意味内容の完結さ・不完結さが原因となって、文章を完結させる上で‘補語’という要素の要・不要が決定されること、言いかえると、文章の構成と文

型の成立が、総て主要素である‘動詞’の性格に帰因すべきことを指摘し、英文の構成上‘動詞’という品詞の重要性を強調し、学習者に認識させることが必要である。

さらに、英文の五文型の差異・分化を成立させる上での「語順」(Word Order)の決定的重要性については、‘Tom struck Jack. / Jack struck Tom.’という英文の2例が簡潔に伝えてくれる。つまり、第三文型〈S + V + O〉の動詞の前後に位置する主語(S)と目的語(O)が、それぞれ能動と受動の立場を指示する関係を明示しているわけで、その立場を決定づけるものは、まさにそれらの位置でしかないわけである。

今日のフランス語、イタリア語、スペイン語等、ラテン語を共通基語にもつ現代西欧諸語の動詞(V)の活用語尾変化の有様を一部簡単に例示して、他の語との文法的関係を示す動詞の屈折語尾(変化)が、OE時代と違って現代英語においてはBe動詞、一般動詞の‘三人称単数形現在’の一部を例外として、消失している事実を学習者に指摘し、英語文の統語関係を明示する上で、今日の他の西欧諸語と違って、英語においては述語動詞を中心にした「語順」が英文の成立に決定的な役割を果たすことに触れるのも、学習者の理解と学習の興味づけの視点から有効な教授法であると言えよう。

〈文型の成立について〉：まず前掲の英文の事例から文中の語・句・文をいくつか取り出して、‘I walk.’〈わたしは歩く。〉／‘This is a pen.’〈これはペンである。〉のふたつの英文が、意味の最小単位である‘語’あるいは幾つかの語が集まって独立した意味をもつ‘語群’とは違って、ある完結した意味内容を備えていることを理解させる。そして例示された英文の意味(和訳)から、一体「何」のこと、「誰」のことがどのように記述されているのか、という観点から主部(S)・述部(P)の関係を引き出し、総じて主語について文頭より二番手に位置する動詞(V)の性格が、その意味内容から‘完結した内容’をもつものかどうか、あるいは完結した内容をもつものであっても、主語との関係だけで統語関係がはたして完結しているのかどうかを判断させる。かりにも動詞の指示する動作の内容が、主語以外の‘他の語’に及ぶ場合、換言すれば、その動作の対象になる語が他に必要とされる場合には、‘他の語’の‘他’を採って「他動詞」と呼称されること、さらに、動詞の意味内容が影響を及ぼしうる〈他の語〉とは「動詞」の指示する動作の対象(Object)になっていること、この対象(語)が目的語(O)という言葉におきかわることに触れて、ここで自動詞と他動詞の存在と性格の差異に言及することになる。そして、動詞の意味内容から判断して、ひとつの‘他の語’即ちひとつの‘目的語’の存在だけでは文意が完結せず、もうひとつの目的語や補語を必要とする動詞の存在を指摘し、それぞれあらたなる目的語や補語を配置することによって文意が完結することを、前掲の第四文型および第五文型の英文の例示を通じて帰納的に理解させていく。つまり、文型の分化の過程を動詞の性格の差異に収斂させていくのである。

## (2) 英文の構造——語彙分析——

英語という外国語を初学者あるいは学習遅進者を対象として、教授すべき内容を精選し重点項目化した上で、短期速習的に教授するアプローチのひとつとして、まず英文を構成している語彙の種類や性格、単純化した英語の統語法などに着眼した。そのうち、一つの英語の長文を参考例として語彙分析した結果は、つぎの通りであった。

### (資料文 1)

I 次の英文を読んで、下の設問に答えなさい。

Many Americans and Europeans today see Japan ( a ) the genuinely Westernized nation in Asia. We see what appears to be the capacity of the Japanese to copy the ways and thought of the West. We are interested in the ability of the Japanese to reform a once-feudal political and social order ( b ) an apparently democratic society. We respect Japanese efforts to build an economy that rivals those of the West in organization and productivity. Looking at these and hundreds of other changes in Japan over the last century, many Westerners believe the Japanese themselves have changed and are now like us.

This image, however, is an illusion that is reflected from the surface of Japan, and the core of Japanese tradition has been little touched by invasions from the West. Western influence has changed the face of Japan and the appearances of Japanese life, but it has not penetrated the minds and hearts of the Japanese people. The Japanese have taken from the West a few things whole (technology), adapted and made Japanese others (political forms, economic organization, and the press), and rejected completely still others (Western religions).

But the illusion of a Westernized Japan has regained strength in the last twenty-five years, ( c ) the stronger impression that Japan was turning more and more to the West. Americans and Europeans, however, overlook the continuity in Japanese thought and the other forces in Japanese life. It fails to take ( d ) account the selective nature of Japanese acquisitions from the West. More important, it underestimates the absorptive genius of the Japanese, who have taken 'forms' from the West and molded them around the 'substance' of Japan. The things Japan has borrowed from the West are changed by the Japanese. History shows that innovations originating within a society are far more telling and lasting than those coming from without. There is, of course, much interplay between internal and external cultural forces in Japan.

Japan is still essentially Japanese—and very different from the West. Kawabata Yasunari, winner of the 1968 Nobel Prize for Literature, asked whether the Japanese tradition isn't in the process of extinction, replied: "I don't think so. Despite industrial imperialism, despite television, despite the crush of urban life, the Japanese essence will remain. Don't look for the Japanese essence in society but in the individual."

All of us tend to see things abroad in the image and likeness of our own environment. We Westerners like to see in the Japanese the outward appearances that are familiar: their clothing, building, and manners similar to ours. Western journals and newspapers have done little to correct this misleading picture. And the Japanese themselves promote illusions about their country. The theme of modernization, industrialization, and Westernization has been a favorite of many Japanese as they have striven to "catch up" ( e ) the West.

Japan in the mid-twentieth century has not become Western in the essence of its national character. Japan never will. Japan, rather, is heading into a time in which traditional Japanese values and ways are becoming even stronger in determining the course of the nation and lives of its people.

### 【全文訳】

今日欧米人の中には、日本をアジアにおける真に西欧化した国家と考えている人が多い。西欧の風習や思考の方法を模倣する日本人の生来的な能力とおもえるものが目につくが、一度は封建的な政治社会体制であった社会を、確固たる民主主義社会に変革した日本人の力量に西洋人は大いなる関心を寄せ、その経済構造や生産性の点においても西欧諸国の経済力に匹敵する力を備えようとする日本人の努力に敬意を表している。このような変化や日本社会の過去一世紀に互る、他の何百という変化を目のあたりにして、日本人自体が変貌して、いまや西欧人の特性を示していると思ひこむ人が西欧人のなかには多い。

しかし、このような日本人に対するイメージは、日本社会の表層に起因する誤解であって、日本社会の伝統の核心

部は、西欧諸国の圧倒的な侵入にほとんど影響を受けてこなかったのである。西欧諸国の影響を受けたことによって、日本社会の表層と日本人の外面的な生活スタイルが変化してきたことは事実ではあるが、その影響が知的にも心情的にも日本人の心に深く入り込むことはなかったのである。日本人が西欧諸国から全面的に採り入れたものは少しはあるが、——例えば科学技術——、日本的なものに改造した分野も他に多々有り——例えば、政治形態、経済体制および報道機関——、さらにまったく受け容れなかったものもある——例えば西欧の宗教がそれである。

しかし、西欧化した日本という錯覚は、ますます西欧志向に走る日本という印象が強まると共に、過去25年間再び力を増してきたが、ここでも米国人やヨーロッパの人々は、日本人のものの考え方の連続性や日本人の生活に影響力を持ち得る他の要素を見落しているわけで、そのために西欧諸国から日本人が移入吸収したものの中に、日本人特有の取捨選択性というものが、存在することが判らないのである。更に重要なことは、日本人が先天的に備えている摂取能力を過小評価しているわけで、日本人は今日まで西欧から“形式”というものを摂取すれば、それを日本社会を構成する“本質（的要素）”に基づいて造りかえてきたのである。つまり、日本が西欧から借用したものに日本人自身が変化を加えるわけである。歴史が教えるところによると、社会の内側に発生する新しい変化というのは、社会の外側に起因する変化に比べてはるかに大きくかつ持続性のあるものである。日本社会の中に存在する内外の文化的諸要素の間に多くの相互作用があることは言うまでもない。

日本社会は、今日なお日本人的本質を持ち合せ、西欧社会とはきわめて異質である。1968年ノーベル文学賞を受賞した作家の川端康成は、日本の伝統は消失の過程に在るのではないかと問われて、つぎのように答えている。「私はそのようには考えていません。産業帝国主義が支配し、テレビがあり、圧倒的な都市生活の登場にもかかわらず、日本人の本質はいつまでも変わらないでしょう。日本人が日本人であることの実体を社会の中に求めるのは間違いであって、それは個人としての日本人の中に求められるべきであります。」

日本の国が西欧化しているという誤解が広がったのには、いくつかの理由がある。私達すべてに言えることだが、自国の生活環境に対する印象とその類似性の観点から、外国のものごとを見る傾向があるわけで、この点については西欧人も同じことで、自らのものに似た日本人の衣服とか、建物とかその行動（作法）と言った見慣れた外見を日本人の中に求めたい気持ちになる。西欧諸国の新聞や雑誌は、この日本人についての誤解を招く描写の仕方を改めるのに、ほとんど役に立っていない。さらに日本人自身がこの国についての誤った考え方を助長している。近代化とか、工業化、西欧化というテーマは、西欧に“追いつく”ために奮闘してきた立場からして、多くの日本人にとって大好きな題目であったためである。

二十世紀半ばの日本を見ると、その国民性の根本は西欧的でないし、今後とも西欧化されることはないだろう。それとは反対に、今日の日本は、国家の進路とその国民の生活を決定する上で、日本社会の伝統的な価値観や慣習がますます影響力を行使する時代に向っているのである。（拙訳）

上掲の英文（資料文1）は、国際政治および経済の分野における今日の日本の経済的進出に起因する、広義の文化摩擦を背景とした外国人の‘日本人観’の一端を著した記事内容であるが、いわゆる比較文化・異文化理解の問題を取り扱ったものとして、昨今の大学の授業用テキストのなかに、あるいは大学入試問題の出題の対象として頻出する題材である。「名詞表現」の多い英文の意味内容と前後のコンテキスト（文脈）から理解し、かつ同じ語彙の重複使用を避ける英語表現の特徴から同義語を中心に、英語の語彙に対する関心とその知識がもとめられる。本文は簡潔なエッセイであり、難解な英語構文が含まれていないので、英単語の意味が理解できれば、比較的読み易い英文である。1984年版〔英語Ⅰ〕〔英語Ⅱ〕〔英語ⅡB〕の高等学校用教科書、計74種類76冊を対象として文部省が作成した「英語教科書使用語彙（英語Ⅰ・英語Ⅱ・英語ⅡB）」〈高等学校編〉は、学習すべき語彙数を中学校・高等学校あわせて2,300～2,950語と明記しており、その一覧表にもとづいて本文中に現われている、総ての英単語を調べた結果、‘underestimate’ ‘interplay’ の2語を除いて、総ての語彙がそのままの形で、一部については——continuity, selective, acquisition, telling, lasting, modernization それぞれの基語の形で登場している。したがっ

て、語彙分析の資料文としては適当であると考える。

本稿の主旨の一端を伝える資料文としての本文は、昭和59年度相愛大学音楽学部入学試験問題〈英語〉の一部として出題したものに、さらに原資料に含まれている有意の言語材料を加筆して、いくつかの設問形式を用いて教材化したものである。

この無作為に抽出された、ある一つの完結した内容をもつ英文を事例として取り上げ、その文中に使用されている英語の語彙の文法的性格、つまり品詞の種類と同一品詞の使用頻度を調べてみると、本文においては全文中の語彙数517語、その内訳は名詞165語31.9%（内、代名詞24語4.6%）、形容詞125語24%（内、冠詞60語11.6%）、副詞32語6%、動詞77語15%（内、助動詞21語4.1%）、前置詞78語15%、接続詞40語7.7%（内、関係詞7語1.4%）を数える。なかでも、名詞と動詞の合計したものの全体の語彙数に占める比率は約46%、助動詞を含めると約51%にのぼる。専門分野の語彙、つまり専門用語（Technical Terms）が駆使された多様な種類の英文、多様な個性を持った書き手の英文の存在を承知するとき、本文が総ての英文の構成を代表するものでないことは言うまでもない。しかし、英文の構成を語彙の文法的性格の観点から眺めるとき、上記の単純な分析からも理解される通り、英語を教授する際に重要視すべき英単語の種類つまり品詞〈内容語・機能語〉は、名詞（＋代名詞）・形容詞（＋冠詞）・副詞・動詞（＋助動詞）・前置詞・接続詞（＋関係詞）等おのづから限られてくることが分る。この点において、既述の本稿の主旨に照して、英語を教授する際には、その内容（項目）を精選し、限定し、重点的に教授することが可能となる。

上記の英文中の（ ）内の空所(a)(b)(c)(d)(e)は適切な前置詞を挿入して文意を完成することをもとめる空所補充の設問であり、下線部(4)も、同様に前置詞の意味・用法を問う問題である。さらに、その意味内容に対する理解力を問う下線部(3)(5)(6)の三つの英文は、英語特有の総じて‘名詞中心’の表現形式を備えた英文であるが、これもまた英文中の前置詞の存在、その‘機能語’としての重要性和意味用法に対する理解をもとめる設問である。このことから、英文を読解する上で、まず名詞および動詞を中心にした英単語・語彙に対する理解、豊かな語彙を身につけることが不可避免的に必要である、ことが分る。ついで、和文において未発達の‘冠詞’や‘前置詞’の機能・用法に対する理解、おなじく日本語に未発達の動詞の形態、すなわち時制〈テンス〉の問題と一部の屈折語尾の存在、さらに英文中の修飾の諸相（統語法）を成す形容詞群・副詞群の存在、なかでも英語の長文を理解する上で、英文の構成上機能語としての接続詞（群）、とりわけ‘関係詞’の用法——おもに形容詞節——に対する理解を重視すべきことが分る。

このように、英語学習に係わる教授内容（項目）を限定精選し、それらを教授するにあたっては、ごく短い英文の例示よりはじめ、漸次付加的要素（+M）としての形容詞・副詞群を重層付加し、次第に比較的長い英文への移行をおこなう。方法論的には、効果的な



板書法、プリント教材の配置あるいは視覚教材・教具を通じて、英語の文構造の特徴——統語法——を視覚的・立体的に提示することが、効率のよい教授法のひとつの視点として、学習者の容易な理解を獲得することができると考える。上掲の資料文は、英文の構造の特徴をその語彙分析の立場から検証するために引用したものであるが、次項では初学者を対象として、英文の構造とその統語法の立場から教授する場合の、より単純化した事例を取り扱うこととする。(資料文2)

### (3) 英文の特徴

英語の文章について、その全体の構成を簡潔に、しかも視覚的にとらえる方法はないか。いくたの試行を重ねた結果、+M〈修飾語(句)：形容詞・副詞(相当語句)〉の付加的表現形式として、英文の構造を単純化して捉え、概説するための図解例を案出した。

#### ● 英文の特徴——〈付加的重層的表現〉——

展開 (1) S + V + M + M + M + M + M (形・副) 修飾語(句・節) : Modifiers  
主文

英文：——付加的重層的表現(形式)——〈後置修飾〉

展開 (2) S + V + O, who + V + O + to + R ..., R + ing + O ..., with + O + p.p.  
先行詞 関代 +M to不定詞 +M 分詞構文 +M withの構文 +M  
(形・節) (形・句) (副・句) (副・句)  
① ② ③ ④

展開 (3) ex. When (I was) a child, I often dreamt a happy dream

+M (副・節)

〈後置修飾〉+M { (前) of + 名 (形・句)  
関代 (形・節)  
to 不定詞 (副・句)  
分詞構文 (副・句)  
(前) with の構文 (副・句)  
of a nice prince,  
who came up all the way  
to meet me as his partner,  
riding on a white horse,  
with a wide hat on.

展開 (4)——付加的重層的表現(形式)——

Way of Thinking in English = Thinking additionally, with word after word, phrase after phrase, sentence after sentence, for modification.

- (1) 食事をしながら、おしゃべりするのは、よくない。  
It is not good / to chat / while eating./
- (2) 食事をしながら、おしゃべりするのはよくない、と言われる。  
It is said / it is not good / to have a chat / while eating./
- (3) あちらが、先日お話しした男の子です。昨日偶然に町中で会いましてね。その昔とても親切にしてくれました。私にはばかりか、誰かれにも親切にするものですから、皆から好かれていました。  
That is the boy / (whom) I was talking about / to you the other day.  
/I happened to see him / in the street yesterday, / who used to be so kind to me / not only to me / but to everybody, / for which he was loved by all. (拙文)

解説の要点 ——単純化と概説——

展開(1)—— 1) 英文の構成は、総じて「頭小さく、尻でっかち」である。それは、機関車と後続の列車や蛇の頭と胴体の関係にも似ていて、一番大事な英文を構成する主要素が総じて文頭に小さく登場すると、+Mの記号で示されている‘文の従要素’がつぎつぎと付加されることによって、長い英文の構成がなされること、つまり、英文の全体像を視覚的に捉える要領として、英語の文章のつくりが「頭小さく、尻でっかち」の付加的表現形式の構造になっていることを、やさしい英語の短文の事例を提示して概説する。要点：〈英文の特徴——付加的表現形式〉

2) ところで、文の主要素が構成する‘文の中心’（S+V）の後に二重、三重、四重に、あるいは五重に付加される文の従要素である‘+M’の正体は、ことごとく形容詞・副詞（相当語句）であって、したがって英文が長くなる所以はひとえに形容詞と副詞の存在にあることを指摘する。英語の長文の‘仕掛人’は、‘正体’は、‘犯人’は形容詞と副詞（および相当語句）であることを幾度も強調して、英文中の形容詞と副詞および相当語句に対する学習者の理解力が、いかに大切であるか、必要不可欠であるかを訴えるのである。この文構成の従要素である‘+M’（形・副）の存在については、文構成の日英両語の比較対照の上からもきわめて重要な部分であるので、次項の「英語修飾の諸相」のところで取り扱うこととする。

展開(2)—— 3) さて、前掲の展開(1)で指摘した‘英文の特徴’としての従要素‘+M’の付加的表現形式を、既習の英文法の事項とドッキングすると、英文の姿（文構成）はどのような形になるか、を具体的に例示する。つまり、前述した英文の特徴としての付加的表現形式と、学習者にとっては馴染みのある既習の文法事項にここで初めて言及して、学習者の過去の経験的知識との接点をもとめ、未知の経験に対する学習者の心理的な抵抗を最小限に抑えるように留意する。この場合に、文の従要素‘+M’（修飾語句）を成す、予め仕組まれたそれぞれの文法事項、たとえば前掲の展開(2)の英文中の関係代名詞、to 不定詞、分詞構文、前置詞 with の構文の各事項を個別的に逐一取り上げ、その用法について詳細な解説をすることは、当然回避すべきものである。それぞれの文法事項を呼称しながらも、英文中のそれらの機能上の共通点である形容詞あるいは副詞の性格を文脈から指摘して、それらが総て形容詞・副詞（および相当語句）のいずれかに帰属すべき存在であることを認識させる。さらに、それらをM①、M②、M③、M④と呼称して、その文脈から判断して、それらの従要素がそれぞれ‘後方から前方へ’と付加的に結びついている有様、つまり和文とは対照的な英文特有の統語法（後置修飾）の存在を理解させるのである。この段階で、それぞれの文法事項が文構成の機能

上、既述の通り総て形容詞および副詞の性格を備え、そのいずれかに帰属する立場から、形容詞あるいは副詞の文法的・統語的機能とその文中の位置について簡単に触れておくことが必要である。次項のなかで記述するとおり、なかでも‘副詞’の意味・用法およびその位置を理解していない学習者はきわめて多いと言わなければならない。

以上の解説からも理解される通り、本稿の主張する文法指導の基本は、英文中の文法事項をそれぞれ個別的に取り上げるのではなくて、関連の文法事項を出来るだけ同時進行に取り上げ、それらが持ち合わせる統語上の同じ機能に学習者の関心を向けさせることを第一義とし、その後の学習の進展に合せて個々の文法事項を逐次取り上げるというものである。

展開(3)——4) 以上のように、展開(2)は学習者の多少とも既習の文法事項にもとづいた英文の付加的表現の展開例であったが、それを更に完結した内容をもった英文として例示したのが、展開(3)の英文である。幼拙な英文であるが、学習者の理解を容易にするために、前掲の展開(2)に照応させて、その文中に用いられているそれぞれの文法事項を予め織り込んで意図的に用意された資料文である。下線と矢印を用いて、英文の統語法のなかの‘後置修飾’の有様を示した例文であるが、初学者にとっては英語の文構造の一端を指示するものとして、その理解が容易になると考える。

#### (4) 英語修飾の諸相

英語という外国語に対して‘苦手意識’をもつ‘英語嫌い’の日本人学習者のなかには、英語の語彙の絶対量が不足している問題を論外として、彼等の目標言語 (Target Language)である英語の文章構造に対する理解が、「文型と語順」の段階にとどまり、英文中に現れる他の統語的諸関係、なかでも形容詞および副詞 (相当語句)の英文中の機能をよく理解していないものが多い。このことは、英語の学習者ばかりか英語の教授者の立場においても、その方向の教授面の重要性が十分に‘意識化’されていない嫌いがある。

英文の構造を‘姿の见えない’ (Invisible)言葉として、口頭で抽象的に論じ、学習者に教授するのではなくて、英語の表層面の構造として、単純な句構造の規則性を視覚的に捉え、かつ表現する方法を案出することの意義および必要性は、前項において既述したところである。この項においては、構造言語学の範疇の一部門としての英語の統語法を、さらに狭義に解釈して、その全体を形容詞・副詞 (および相当語句)の性格をもつ修飾語 (句・節) [Modifiers : 以降+Mとして表示] の存在として捉え、単純化し、限定し、例示することによって学習者の立場での容易な理解を引き出そうとするものである。

換言すれば、「文型と語順」を基準にした英語の文章構造とは別に、「文型」を決定づけ

る主要素 (Principal Elements) に対する従要素 (Subordinate Elements) が、前置的にあるいは後置的に付加される +M (修飾語) として英文中に現れる種々の統語関係に対する理解を、まず第一義的に学習者にもとめるのである。そのためには、英文の中心となる主要素 (ex. S + V) に対して付加的要素となる +M (形・副) の中味・内容を形容詞群と副詞群の二つに限定し、同じ英文中の他の要素 (主要素あるいは従要素) との統語関係を簡明に例示することが、初学者が英文の構造を理解する上で有効であると結論づけ、その主旨を『英語修飾の諸相』として具体的に展開した教材が以下のものである。——そのうち形容詞群についてのみ例示した。

### 英語修飾のいろいろ

Modifiers (修飾語):  
+M ——— { 1. Adjectives (形容詞)  
2. Adverbs (副詞)  
および形・副相当語句  
(形容詞句・節・副詞句・節)

- Modifiers (修飾語) 形・副 (句・節) = M (位置: 前後から修飾する)
- +M の位置 (簡略化)
  - 1) 形容詞群: M + [名詞] + M
  - 2) 副詞群: M + S + M + ① + ② + M

#### ① +M <形容詞群>

1. 形容詞 + 名 (日本語の語順と全く同じ)

a beautiful flower  
(美しい花)

my underseas motion-picture camera  
(私の海底映画撮影用カメラ)

2. 名 + 形 (英語では名詞の後ろから前の名詞を修飾するという日本語にはみられないような修飾法を取る。)

something good  
(何かよいもの)

something beautiful  
(何か美しいもの)

3. 名 + 文 (日本語とは全く逆になる)

the man (I saw yesterday)  
(昨日私が見た男)

a bird (I saw in the forest)  
(私が森でみた鳥)

4. the man (whom I saw yesterday)

a bird (which I saw in the forest)

5. 名 + 不定詞

a man to help you

君を助けてくれる人 (man は help に対して主体 (主語) の関係)

something to drink

飲み物 (something は drink に対して客体 (目的) の関係)

time to go

(行くべき時)

something for you to drink

(何か君が飲むもの)

time for you to go

(君が行くべき時)

6. 形 + 名 + 文 (名詞の前後から修飾するもの)

a beautiful bird I saw in the forest

(私が森で見た美しい小鳥)

a beautiful bird which I saw in the forest

my underseas motion-picture camera (which had been lowered to me from the deck of the tender far above)

(ずっと上の作業船から前もって私のところへおろされてあった海底撮影用カメラ)

7. 分詞 + 名、名 + 分詞

a running dog

an English speaking country

(英語を話す国)

a broken window

a window broken by him

彼によってこわされた窓 (彼がこわした窓)

8. 名 + 分詞 (日本語とは正反對の語順)

a dog running along the street

(通りにそって走っている犬)

the waves breaking on the shore

(浜にくだける波)

9. 名 + 名 (後の名詞が前の名詞を修飾する場合)

a boy your age

a model the size of life

a hotel this size

(君の年ごろの少年)

(専考大のモデル)

(これぐらいの大きさのホテル)

10. 名詞 + 形容詞句等

a garden full of fruit trees

a cask for the wine

(くだもの木でいっぱい庭)

(酒だる)

a vase with flowers in it

the time for a great spring festival

(花が (その中に) いてる花瓶)

(大きな春の祭典の時)

the poor old man next door to him

(彼の隣りに住んでいるかわいそうな老人)

(注) 英語修飾の諸相——英語の文章構造 (文型・語順) についての理解とは別に、いまひとつ学習者にとって大事なのが英文に現れる修飾の諸相である。学習者に対して系統的・総合的に指導することを持論として、形容詞群 (句・節) について顯した教材である。

解 説

- 1) +M (形容詞群) について——上掲の10ヶの英語例はすべて英語特有の修飾関係で、英文中の名詞に語が結びつく事例を集めたもので、日本語と同じ統語法をとる場合(例文1)もあるが、ほとんど全部が英語特有の後置修飾であることをその文意から明示し、強調する一方では、まず母国語の文章構造上の特徴——前置修飾や語順の固定度がゆるやかであることなど——と相異している英語の文章構造についての理解をまず図るのである。
- 2) かつ、+M (形容詞群) の英文中に現れるケースは、上掲の10ヶの事例でもってほとんど総ての英語の統語法——狭義の意味における語と語の結びつきかた——を例示していることを指摘して、学習者が仮に上掲の10ヶの統語例を完全に理解し、応用できるようになれば、英語の読解力は、驚くほど伸長することの可能性を、教授者サイドの指導助言として、学習者に断言するのである。さらに、実際の文中では、どこまでがこのようなひとかたまりの結びつき方をしているのか、を見分ける判断力をこれから養うべきことを指示するのである。

(5) 英文法の指導——重点項目化——

わたくしたちが日本語を母国語として有し、自らの母国語とは異なった言語体系を備えた英語という外国語の学習をおこなう場合に、英語の構造に見られる具体的な言語事象を観察し、そこに形態的範疇にもとづく一般の規則性が存在することに注目して、その規則性を体系化し、それによって英語を学習することは、便益性がきわめて高いと言わなければならない。幼児が自然言語として自らの母国語を習得する場合とは違って、日本人の学習者なかでも成人が英語を学習する場合には、尚更その感を深くする。

さらに、日本人学習者に英語を教授する場合に、その言語構造の規則性を重視する性格をもつ規範文法を教授すべきであるのか、それとも言語事象をありのままの姿で捉えて、これを記述する立場に立つ科学文法を教授すべきであるのか、という問題について議論のわかれるところであるが、いづれにしても言語構造の形態的範疇にもとづいた、その言語特有の規則性に注目して言語事象を体系化し記述する点においては、その両者の間に相異は認められない。しかし、日本人の学習者を対象として、言語学習をすすめる場合には、日英両語の言語構造および事象があまりにも掛け離れているために、学習しようとする特定の目標言語 (Target Language) の備える‘規則性’、つまり英文法にのっとり教授することは、きわめて有益である。今日‘学校文法’とも称される規範文法は、歴史的に文法の代表ともいべきラテン語文法にその範をとり、その規範性の強いものであり、他方、科学文法は近代における科学的な言語学 (Linguistics) の研究の所産である。今日の内外の英文法書をひもとくとき、以前のような徹底した規範性をもとめる‘学校文法’を主張

するものはないが、この点における本稿の立場は、今日の学校教育の場で実際に、どのような性格の英語がどのような教授法の下で、その用語と定義を用いておこなわれているのか、を直視し、その実態にあわせて新しい教授の方法を模索するものである。<sup>(注2)</sup>

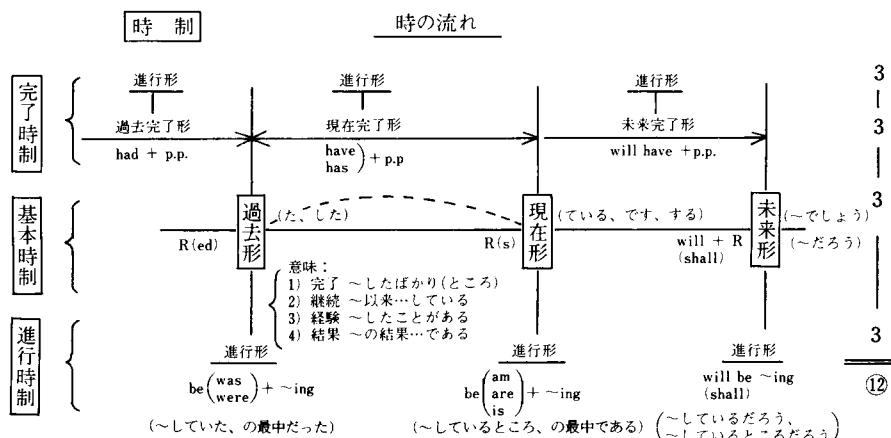
さて英文法の教授面における本稿の主眼は、その言語事象としてのそれぞれの文法事項の取り扱い方、教材の提示の仕方、授業の組み立て、それら全体を構想する教授者の創造力の四点を授業展開する上での戦略 (Strategies) の支柱として捉え、総じて以下の特色を備えるものである。1) 学習内容 (事項) の精選 2) 教授方法の単純化・簡略化 3) 包括的理解 4) 視覚的な教材の提示 5) 機能的統語論 6) 日英両語の比較対照 7) 難解な用語を使用しないこと。 8) 教授サイドの演技的要素。 標題に明示する「やさしい英語教授法」は、また一面では 'A Visual Approach to the English Grammar' の副題をもち、効果的な板書の方法を含めた視覚的 (Visual) な教材および学習内容の提示の仕方をモットーとするもので、学習対象の言語である英語が 'written language' として、きわめて論理的であり、したがって視覚的に捉えやすい構造であるために、この教授法上の視点は正鵠を得て、著しいメリットを備えている。他方、その表意文字の存在とは別個に、文構造の観点から視覚的な把握が困難である日本語を国語とする学習者の立場においても、英語の論理的構造の立体的な把握の仕方、換言すればその文法事項や統語法の図解による機能的な理解の仕方は、対照言語学上の日英表現上の差異に対する認識の機会を提供するものとして、まことに意義深いと考える。こうした Visual な内容をもつ教材の提示の有効性を強調する教授法上の留意点は、幾多の文法書やテキストのなかにも試みられている視点であるが、本稿のなかでは、このような関連図書<sup>(注3)</sup>の中での取り扱い方を考察しながら、さらに独自の展開例を顕したいと考える。英文法学習をすすめる上で、それぞれの言語事象を個別的に教授するのではなくて、英語の文章構造の全体の枠組みのなかで俯瞰し、コンテキストから機能的に統語し、できるだけ包括的理解をはかるといふ、一見単純ではあるが、いわば几帳面さのもとめられる教授法を自らの持論として顕してきた。以下に英語の文法事項のなかでも、日本人学習者がもっとも理解しにくいと考えられる事象を重点的に指導すべき四つの項目として取り上げ、その教授法上の取り扱い方を簡述したいと考える。

#### 1) 「時制」(テンス) の問題——「完了時制」を中心として——

英語に現れる「時制」(Tenses) の種類および概念が、学校教育の場でそれぞれ単元化されて順次個別的に取り上げられる傾向があるが、英語の「時制」を教授する際には、時間の前後関係から論じ、できるだけ全体の時間的枠組みのなかで包括的に教授すべきもの、と考える。

英語の動詞の時間的關係を指示する日本語の文法用語の曖昧さが一因となって、あるいは日本語のなかに動詞の「時制」の発達が十分に認められないために、「時制」の問題は

日本人学習者には理解しにくい側面がある。英語の動詞の形態のなかでも、二つあるいは二つ以上に跨る時制、たとえば、「現在完了時制」はそれが‘現在時’に属するのか、それとも過去時に属し、一種の過去時を指示するのか、いずれも明示されず、概して‘動作の完了’といった観念的・用語的説明が先行するために、初学者によって、それが過去または過去の一つとして理解される傾向がある。きわめて単純なことであるが、このような誤解を通じて教授サイドが留意すべきことの一つは、英語のなかに登場する‘時間的關係’を示す総ての動詞の形態を、その時間的空間的距離によって、‘時間の流れ’のなかで捉え、その用法を「時間」の前後関係において論じ図解し、それのできる限り種々の動詞の形を同時進行的に取り扱うことである。以下の教材は、このような主旨に立って図式化したものである。なお、それぞれの「時」を指示する動詞の形態と用法、およびその英文の用例は、周知のこととして、本稿ではその記述を省略する。



## 2) 準動詞 (Verbals)——「不定詞」・「分詞構文」・「動名詞」

「準動詞」とは、‘準決勝’‘準社員’の言葉の意味からも理解される通り、‘動詞に準ずる’存在として、なかば動詞の性質を備えているがそのほかに名詞、形容詞、副詞の機能を兼ね備え、文中で種々複雑な働きをするために、初学者にとっては概してその全体像が見えにくい学習事項である。それはまた、不定詞 (Infinitive)、分詞 (Participle)、動名詞 (Gerund)の総称であるが、例によって、その用語は総じて抽象的であり、初学者にとっては理解しにくいところがある。ひとつには、学校の文法学習の場で、これらの準動詞のそれぞれがもつ形態と用法、時制 (テンス) の表し方や意味上の主語の有無などが、それぞれ個別に教授されることによってそれらの関連性が無視され、かえって学習者の理解を困難にしている。学校教育の場で、準動詞の一つ一つが単元化され、個別的に取り扱われることにも、その一因があると考えられる。もちろん学習活動の段階やその深化に応じて教授のタイミングを分化することにもメリットがあるが、学習者の「動詞」に対する既習の理解内容の延長線上で、準動詞の全部に共通する部分、つまり動詞の性格と、それ

それにとって共通しない部分、すなわち名詞・形容詞・副詞の機能をそれぞれ個別的に備えているところを明示する教材を提示することが、学習者の理解を助けるところ大である。なかでもその共通項に対する学習者の理解力を誘因として、英文中の準動詞の用法を全体

### 準動詞 (VERBALS)

	形	態	意味上の主語	文中の機能
	単純形	完了形		
(1) 不定詞	to + R R	to have + p.p. (have + p.p.)	for [S] to + R [前]	名・形・副(%)
(2) 動名詞	[前] R + ing	[前] having + p.p.	[前] One's (one) 所有格(目的格) } + ~ing	名(%)
(3) 分詞(構文)	R + ing (-ed)	having + p.p.	One 主格 } + ~ing	副(%)
主動詞	同時(性) または 以後の時	以前の時	(※)文中の「主語 + 述語」の関係(ネクサス)に留意し、節(S + V)のように訳出すべきこと。	

#### 文の書き換え

- (1) 単文: S + V  
(2) 重文: S + V and S' + V' (等位接続詞) 対等節  
(3) 複文: Though S + V, S' + V' (従位接続詞) 従節 主節

#### 文法内容

語・句(名・形・副)  
不定詞(名・形・副)  
動名詞(名)  
分詞構文(副詞句)  
接続詞<従位接続詞>  
関係詞<代名詞・副詞>

#### EX.

不定詞

It is wrong to tell a lie. (一般的)  
It is impossible for me to do it. (特殊の—主語を明示)  
S  
He seems to be ill. (現在)  
He seems to have been ill. (現在完了 or 過去)  
He seemed to have been ill. (過去完了)  
To tell the truth, I don't like him. (独立不定詞—副詞句)  
He must have done it.

動名詞

It is no use / crying over spilt milk. (一般的)  
It is no use / our asking such questions. (特殊の—主語を明示)  
S V O  
It is no use / our having asked such questions. (過去)  
S V O  
形式主語

分詞(構文)

Formal subject | Sense Subject (意味上の主語)  
[S] Walking along the street, I met a friend of mine.  
(When I was walking, ...)  
[S] Having finished the task, he went out.  
(As or After he had finished the task, ...)  
The sun having set, we arrived at small village.  
S V  
(After the sun had set, ...)  
It being fine, we went for a walk.  
S V  
(As it was fine, ...)

の連関性のなかで機能的に教授することが教授法上有益である。以下は、準動詞をそれぞれ別個に教授することを避けて、‘動詞に準ずる’性格を共通項として英文全体の枠組みのなかで同時進行的に取り扱い、英語の統語法のひとつとして、その形態と用法、時制(テンス)の表し方を教授した際に用いた教材である。いずれの準動詞においても、その完了相についての理解がなかなか難しいようにおもえる。

### 3) 関係詞

前掲の第3項「英文の特徴」と題し、そのなかで英語の言語構造は「頭小さく、尻でっかち」と形容し、総じて文の主要素が冒頭に位置し、形容詞および副詞相当語句が文の従要素として後方に二重に三重に付加される表層構造をもつ。この後置修飾の特徴を付加的表現と呼称し、日本語ときわだって相異なる点であるところから、日本人の初学者に対して英文の構造を教授する上でもっとも重要視すべきところである。この英文の後置修飾を形成する言語事象のなかでも、総じて形容詞節として英語の長文のなかに現れるもっとも



頻度の高い要素が関係詞節で、英語修飾の諸相のなかでもその統語法の一典型として、英語の学習者に対して必ずその理解をもとめなければならない文法事項である。その機能は、周知される通り、英文中において二つ以上の観念を相互に関連づけ、その付加的な統語的機能を通じて、より複雑な完結した思想内容を伝達することである。

この関係詞は、文の主要素に対する従属節 (Subordinate Clause)を導き、その節において名詞・形容詞・副詞の機能を持ち、それぞれが関係代名詞、関係形容詞、関係副詞と称されるが、これもまた日本人の学習者にとって、その用語の‘いかめしさ’の故になかなか理解されにくいようにおもわれる。

こうした難解な外観をもつ関係詞を、単純に‘接続詞’と置きかえ、接続詞とそれぞれ名詞、形容詞、あるいは副詞の機能を併せもつところで、一旦それぞれを接続代名詞、接続形容詞、接続副詞と呼び換え、一文中二つの機能をもつという関係詞の基本的な性格とその統語法を図解し、学習者の容易な理解を得ることを意図して視覚的に提示した教材が以下のものである。既述の関係詞は、それぞれ名詞節、形容詞節、副詞節を従属節として導き得るが、なかでもその典型とも言える形容詞節の機能をもつ統語法とその埋めこみの過程をやさしく図解したものである。

## 関係詞の性格

### 1. 関係代名詞

= ⑧ + ⑨

and	+	he (his, him)
but		they (their, them)
for		it (its, it)
because		

= who (whose, whom)  
Which (whose, of which, which)

ex. 主節 (文)      従節 (文)      欠落

S + V + O      who + V + C      S (he, they)

先行詞 (名)      whose + 名詞 S + V      one's (his, their)

↑      whom + S + V      O (him, them)

↑      which + V + O      S (it, they)

↑      whose + 名詞 S + V      one's (its, their)

↑      which + S + V      O (it, them)

↑      that + V + C      S (he/it, they)

↑      that + S + V      O (him/it, them)

形 (節)

(日) 訳順 — (英) 後置修飾

### ex. Who

- a. She has an uncle. He is very rich.  
She has an uncle who is very rich.
- b. She has an uncle. His name is Henry.  
She has an uncle whose name is Henry.
- c. She has an uncle. She loves him.  
She has an uncle whom she loves.

### 2. 関係副詞

= ⑩ + ⑪

and	+	there (場所) (そこに、へ)
but		then (時) (そのとき)
for		therefore (理由) (そういうわけで)
because		thus (方法) (そのようにして)

= where (when, why, how)

ex. 主節 (文)      従節 (文)      欠落

S + V + O      where S + V      + M (there)

先行詞 (名)      when S + V      + M (then)

↑      Why S + V      + M (therefore)

↑      how S + V      + M (thus)

形 (節)

(日) 訳順 — (英) 後置修飾

### ex.

- This is the village where Dr. N. was born.
- He lived in an age when the airplane was not known.
- This is the reason why I did not go with her.
- I don't know (the way) how it happened.

#### 4) 仮定法

英文法のいろいろの言語事象を指示する日本語の文法用語は、学習者にとってはとかく曖昧にして難解な印象を与えるものが多い。「仮定法」という用語のなかの‘叙法’を表す「法」という文字についても、大概の英文法書のなかで‘話者の心的態度’とかそれに近い記述がなされており、話者の‘心の状態・気分’の意を表す英語の相当語‘Mood’に比べると、日本人学習者の理解しにくい言葉である。したがって、文法事項としての「仮定法」の意味・用法を解説する際にも、この用語の説明からはじめることが望ましい。さらに、学習者の母国語である日本語のなかに、英語の「仮定法」、「直接法」のいずれを問わず、「時」の概念を表す動詞の形である「時制」が発達していないために、それを教授する冒頭において「仮定法」と称される領域の基本的な性格について十分に説明しておく必要がある。本稿においては、「仮定法」という呼称の仕方にもひとつ誤解を生む原因があると判断し、「直接法」・「仮定法」の用語を、幾多の英文法書のなかにも指摘される通り、それぞれ「叙実法」(Fact Mood)・「叙想法」(Thought Mood)という用語を用いて、その意味概念を解説することの方が学習者によって理解されやすいと考える。英文法事項としての「仮定法」について留意すべき教授法上の本稿の留意点は以下の通りである。

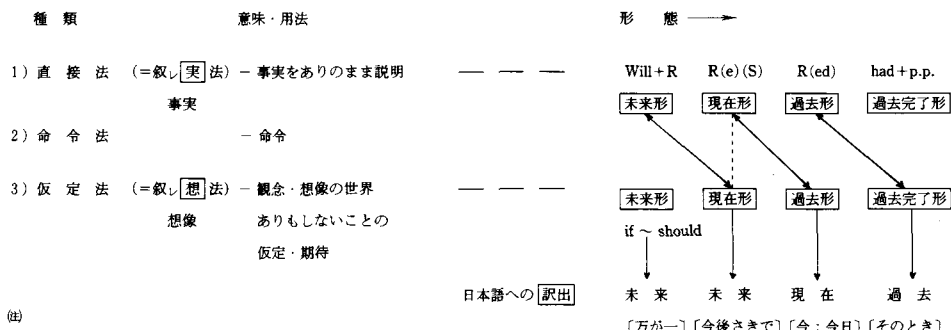
i) 定義——その概念・性格を表現するにあたって、どのような概説をなすのか。その例示を資料文(2)を参考にして創作してみると、次のような世界を顕すことになる。

“わたくしたちの気持次第では、想像力をたくましくすると、白い馬にまたがった王子さまが、いつか自分の面前に現れて、わたくしを王子の妃として迎えるために、はるばると遠方から白い馬に跨ってやって来る、そのような夢をみることもできる。もちろん、郷ひろみや山口百恵とも結婚できるし、羽根がはえて鳥にでもなれば自由に大空をはばたいて、大洋の孤島にも月世界にも住むことができるのだ。英語の「仮定法」の世界は、実にすばらしい世界でね。ほら、テレビ漫画に登場する主人公達のように、犬や他の動物たちとも自由に口がきけるし、魔法の力を使って、こつぜんと姿を消したり、大空を猛烈なスピードで駆けめぐり、悪人をやっつけて弱い者をいつだって助けてやれるんだからね。子供にとっては、嫌な受験勉強もなくせるし、大人にとっては朝夕のいまわしい通勤ラッシュも経験せずにすむ。ほら、子供にとっても大人にとっても夢の世界さ。英語の「仮定法」の世界は、つまり、このような世界なんだね。”

ii) Visual な解説——「仮定法」の概念的世界の記述は上記の通りであるが、その成立と「直接法」と「仮定法」それぞれの動詞の形態上の照応関係——その形と用法——を指示する図解を用意し、視覚的な教材提示をすることによって学習者の理解をはかる。〈図解(1)の提示〉

# ●「仮定法」の図解(1)

法 [Mood].....[心的態度：気持] (Mental Attitude)



(注)

- 英語には仮定法の動詞の特別の型が存在せず——成文法上の欠陥——従って直接法の動詞の型を借用し。但し、区別するために「時制」をひとつずらして——ひとつ「旧いテンス」を使用する。
- 日本語に訳出する場合に、仮定法の動詞の形よりもひとつ後の時制——つまり、ひとつ若いテンスに訳出すべきこと。

Subjunctive Mood (叙想法——仮定法)

ex.	〈主節〉	〈従節〉
	If it <u>rains</u> <u>tomorrow</u> ,	we <u>will</u> not go out.
	If it <u>rained</u> <u>today</u> ,	we <u>would</u> not go out.
	If it <u>had</u> <u>rained</u> <u>yesterday</u> ,	we <u>would</u> not have gone out.
	If it <u>should</u> <u>rain</u> <u>tomorrow</u> ,	we <u>would</u> go out.

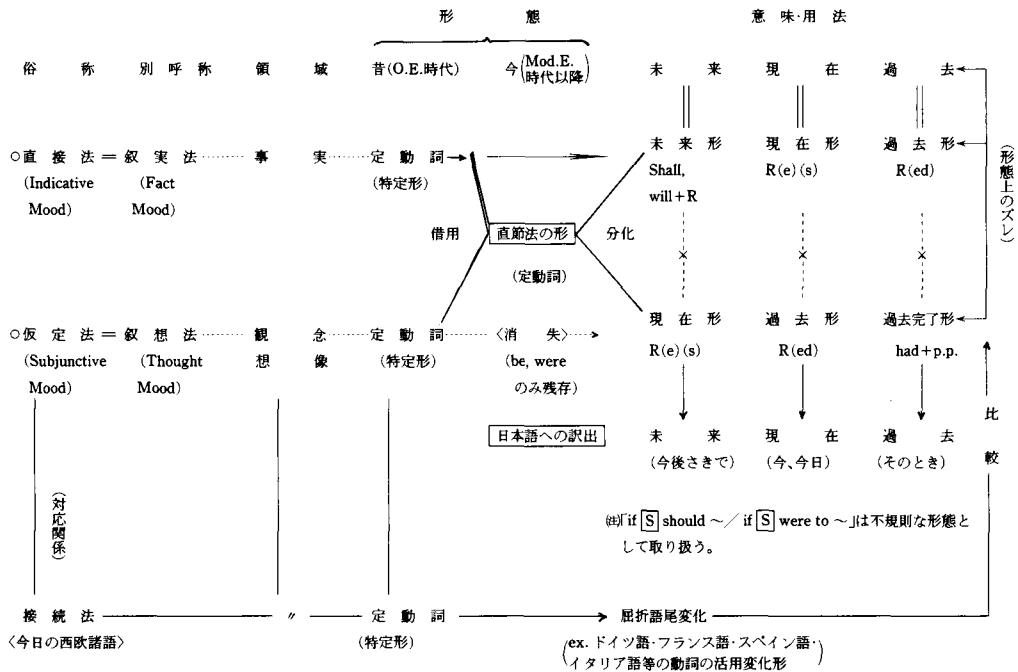
iii) 文法的破格——現代英語には「法」を認めず、それを総て「直接法」の原形および時制の用法として取り扱う立場が存在する。本稿では現代英語の歴史的な生成過程とは矛盾するが、学習者の理解を容易にする立場から、英語の仮定法の動詞の欠落、即ち仮定法の世界を指示する定動詞の不在をもって英語の成文法上の欠陥とみなして概説する。そして、その後において「仮定法」の定動詞の不在を補うために「直接法」の定動詞を借用し、さらには両者の動詞の同じ形態から生じる用法上の誤解を避けるために、「仮定法」においては「直接法」の定動詞の形態よりも「以前の時制」つまり一つ旧いテンスを使用することによって、その「観念・想像」の世界を表す、という帰結を導くのである。

したがって、その解説の基本は、前掲の図解(1)を通じて「仮定法」の動詞のその用法上のテンスと意味との形態上のズレに注目しながら、その簡単な英文の用例、たとえば 'If it had rained yesterday, we would not have gone out.' を例示して、「仮定法」の動詞の語形が表す、いわば「意味上のテンス」が文中の「時」を表す副詞の指示する時間的概念と、論理的关系を越えて呼応していることを指摘するのである。つまり、上文中の 'had rained' と 'yesterday' とは意味上のテンスが一致して、両者共に「過去時」を表すことを学習者に理解させるのである。

とりわけ、年令の比較的高い学習者に対しては、英語以外の他の西欧諸語における「接続法」の定動詞の存在や一般の動詞の屈折語尾、多様な活用変化形の存在に簡単に触れ、他方総じての現代英語における屈折語尾の消失と「仮定法」の定動詞が存在しないことを

英語の成文法上の欠陥と指摘して「直接法」の動詞の借用を引き出す、という解説の仕方は、学習者のはやい理解を獲得する上で、きわめて効果的であった。この観点から、さらに視覚的な教材の提示を試みたのが、以下の「仮定法」の図解(2)である。

●「仮定法」の図解(2)



iv) 意味・用法——「仮定法」の用法についての学習者の理解は、「仮定」または「条件」と「願望」、つまり if 節と 'I wish ---' の範囲にとどまる傾向がきわめて大きい。この点については、①その意味・用法は提案・提示・命令・要求・禁止・主張・祈願等多岐に亘ること、②その共通項はいずれも具体性の無い観念・想像の世界を伝えること、③かつ、いずれもその意味を指示する動詞の形は従文(節)中に現れることなどを指摘し、いずれも英文の用例をもって解説することが不可欠である。(この項の例示を削除する。) 実際には、「仮定法」のテンスは独立文、主節・従節いずれのなかにも現れるが、本稿の立場では、やはり学習者の理解をはかる目的のために、主節のなかでも登場する文法範疇として一応取り扱うことを避けて、専ら従属節中の動詞に現れる変化およびその用法として取り扱うのである。つまり、'Irregular' (不規則性) が多い文法内容としての英語を教授する際には、それぞれの文法事項の基本ルールに触れるにとどめ、'ことば' のルールを出来るだけ単純化して教授することによって、学習内容の早い理解、短期速習の便宜をはかるのである。

### ③ 授業の演出

#### (1) シラバスの存在

本科の「インテンシブ英語課程」のカリキュラムの内容を円滑に推進する上で、幾多の問題点が予想された。それは、前稿のなかでも触れた通りであるが、1) カリキュラム（授業構造）上の問題、2) 言語学習のプログラムの有無と統合性の問題、3) 教授組織上の問題、4) 受講者である入学者の学力の問題、さらに5) 本課程の授業構造を支える上で決定的要因となる Motivation（学習の動機づけ）とその結果としての学習者自らの自己教育力の問題などが挙げられるが、なかでもカリキュラムを構成する講義および演習の学科目それぞれについてのシラバス（教授細目）の存在と学習指導の計画性の存在が、本課程の目標を実現する上で、ひとつの重要な達成条件となってくるにちがいない。換言すれば、本課程の外国語学習の目標とその目標を学習者に意識化させる指導上のアプローチと、年間を通じて一貫性と系統性のある授業を展開するための教授サイドの依拠すべきシラバスの存在がその目標達成へ向けての前提である。前稿においては、このような視点に立って、インテンシブ英語プログラムを推進する企画の一貫として、当初の四年間に具体的に実施した指導措置および留意事項を13点に互って列記した。

本稿においては、本科生の第一年次に集中的に学習する「インテンシブ英語」の指導教員の一人として、当初4～6年間担当してきた学科目 Audio（聴解）・Compo（英作文）・英語－I（英作文法・読解）の授業内容を顧み、それぞれの学科目の性格と毎時の授業の学習目標を明示し、それを具体化するための合目的な年間指導計画と、短期的には綿密な学習指導計画を事前に設定した事例を報告したいと考える。平成元年（1989）度の英語－I（英作文法）および Audio（聴解）の授業展開を例にとると、年間の授業可能実数がそれぞれ25コマという有限の時間量のなかで、学習内容の定着性を第一義とした効率のよい授業をするためには、まづ「何を教えるべきか」という視点から教授内容を少量に精選した上で重点項目化し、毎時の授業進度はいわば「読み切り完結型」とも形容すべき、できるだけ完結した内容をもつ授業展開でなければならないこと、さらに演習形式を重視し毎回の授業終了時に周到に用意された言語テストあるいはなんらかの効果的な課題を実施することを、その特徴とするものであった。既述の通りであるが、その授業の展開における基本的な条件は以下の通りである。

特徴：(1) 学習内容の定着性重視。(2) 教授内容（項目）の精選と重点指導。〈短期集中講座〉(3) 毎時の授業の目標の明示。(4) 関連科目の整合性の尊重。(5) 年間の学習指導計画〈綿密な時間配当〉。(6) 総合的な言語教育のヴィジョンの存在。(7) 教授サイドの授業の演出。(8) 学習行為の動機づけ〈Motivation〉の重視。(9) 自己教育力——‘ひとり学習’の伸長

本科生を対象とした「インテンシブ英語課程」(Intensive English Program; IEP)の内、本稿の執筆者が担当した授業である「英語-I」・「Audio(聴解)」の両授業の年間のシラバスを例示すれば、次頁の図の通りである。〔注：( )内の数字は充当する授業のコマ数を示す。〕

年間の授業実数のなかで教授すべき学習項目の精選を前提とした本課程のシラバスの存在は、高等学校における長期的立場からの「年間学習計画表」あるいは日常の授業目標を指示する「学習指導案(教案)」に相当するもので、年間の授業実数が限られる授業展開のなかでは、その存在は不可欠の要件である。このような外国語教授における教授細目の存在は、その効果としてプログラム学習の総合性と授業演出上の長所を備え、他方では本稿の教授法の特徴である‘Individual Teaching’(一人教授)の側面をもち、‘Team Teaching’(チーム教授)と対峙し、後者の実行性の難しさを補うものである。

付言すれば、本科の「インテンシブ英語課程」のカリキュラムの内容は、その設置申請時に構造化されたものである。既述の通り、指導面における全体の枠組みを統括する学習プログラムの存在、つまり一貫性のあるチーム・プロジェクトとしての企画力・統合力と、その課程を構成するそれぞれの科目の使用テキストの配置と整合性、系統的なテストと演習作業の配置、さらに教授組織上の問題などに、本稿の執筆者は多大の関心を払ってきた。なかでも、全体として本課程の授業構造を支え、発展させていく上でのノウ・ハウと教員組織の存在が、本課程の目標を実現する上で、ひとつの重要な達成条件であると考えた。この点については、本稿の執筆者も含めて、本課程に係わる教授者の関与の仕方は、当初の四年間を振り返るとき、概して個人としての関心と努力の領域にとどまるものであった、と言えるであろう。それは元来、本科の設置主旨に照して、インテンシブ英語課程の学習目標を理解し、それを具体化するための合目的な人事スタッフを周到に用意する必要性を、関係者がよく理解していなかった、とすることができるであろう。一般論として、本科の当初の授業展開としての Oral, Phono, Audio, Trans, Grammar, Compo それぞれの授業が表す Speaking, Listening, Reading, Writing 各部門の授業の展開時における機能の分化と調整が必ずしも上手く進展しないこと、この機能的に多少とも分化すべき授業の展開の過程の中で、教授者自らが一人で総ての部門の教授者でありたいとする、完全主義的な教授者本来の属性を発揮しようとすることはありうることである。あるいはまた、当然のことであるが、教授者本来の研究者としての自立性、専門志向の要求が、チーム教授(team teaching)としての側面を備えた共同作業には馴染まない、ということも指摘できるであろう。今後の方向として、日本人学習者に対して、外国語としての英語を教授する内外の多くの専門家集団を配置するという理想主義的な人事配置がほとんど不可能視される現実と、研究者としての良質のエゴをもつ教授者の主体的職業意識を考慮するとき、多岐の専門分野に互る教授者の専門志向や自立志向を充足させ、かつ team teaching

# SYLLABUS<教授細目>

## ※「英語－Ⅰ」〈年間25コマ〉展開例

	重 点 項 目	教 授 形 式	
1) スタディ・スキル (6) (Study Skill)	① Listening (1) } (2)	〈方法論+モデル演習〉	計7講
	② Speaking (2) }		
	③ Reading (1) } (2)	〈方法論+モデル演習〉	
	④ Writing (1) }		
	⑤ Vocabulary Building	〈文法論+モデル演習〉	
	⑥ 図書案内(1)	〈各分野の図書選書リストアップ〉	
	⑦ 卒論・レポートの作成法(1)	〈概説+演習課題〉	
2) 英作文法 (13) (教授項目の精選) Grammar & Composition ープリント教材配置ー	① 英語の語彙と品詞(1)	〈解 説 + 演 習〉	計12講
	② 文型と語順(1)	――〃――	
	③ 英文の構造(1)	――〃――	
	④ 英語修飾の諸相(1)	――〃――	
	⑤ 関係詞(2)	――〃――	
	⑥ 時制〈動詞の形〉(2)	――〃――	
	⑦ 準動詞(2)	――〃――	
	⑧ 仮定法(叙想法)(1)	――〃――	
	⑨ 日英表現上の差異(1)	――〃――	
3) 英文読解 (6) Intensive Reading & Fast Reading	① 精読と速読(1)	〈速読方法論+演習〉	計6講 (合計25講)
	② 言語文化(1)	〈演 習〉	
	③ 比較文化(1)	〃	
	④ 歴史文化(1)	〃	
	⑤ 文学作品(1)	〃	
	⑥ 政治・経済(1)	〃	

注1. 上記の各項目について、授業終了時約10分間の演習作業を課し、演習用ペーパーの提出をもとめることを原則とする。

## ※「Audio(聴解)」〈年間25コマ〉展開例

	重 点 項 目	教 授 形 式	
1) 音声指導 (5) (発音アクセント)	: '英語音'をつくる。		計5講
	① 英語の音韻(2): 母音・子音	〈概論+演習〉	
	② 発音記号(万国音標文字)	――〃――	
	③ 発音指導・基礎(単語)	――〃――	
	④ アクセント(語強勢と文強勢)(1)	――〃――	

注2. 「Audio(聴解)」授業――「Oral」「Phono」両科目の補完的要素として題材を配置し、学習者のSkill の伸長度の差異を考慮して、必ずしも上記「英語－Ⅱ」の教材内容との連関性をもたせる必要はない。

	重 点 項 目	教 授 形 式	
2) 音読の指導 (4) ー音読カードの設置ー	① 句読法と音読(1)	〈概論+演習〉	計4講
	② リズムと抑揚(1)	――〃――	
	③ 音読と黙読(1)	――〃――	
	④ 音読テスト(1)		
3) 聴解の指導 (16) ーL.L.カードの設置ー	① Listening Comprehension (1)	〈技法+演習〉	計16講 (合計25講)
	② Discriminating (音声の識別): 英語の音韻		
	③ Shadowing と Retention (反覆練習): 日・英両語		
	④ Repeating (反覆練習): 日・英両語		
	⑤ Reproducing と Pattern Practice (文型練習)		
	⑥ Paraphrasing (言い換え練習) 英語		
	⑦ Dictating (書き取り練習)		

注2. 聴解の技法の習得については、上掲の作業内容を毎時演習形式として課し、授業中利用の演習ペーパーの提出を原則とする。

附記1. 中学校・高校段階における今日の英語学習がもっとも欠落させている学習内容のひとつは、リーディングにおける音読の側面である。英文をまづ一定のスピードで読みうるものが初學者の外国語学習の基本である。〈音読の重視・音読カードの設置〉

- 前掲3) 英文読解 (6コマ) の授業展開については、題材となる英文の内容が1コマ(時限)の授業内容として適量の、いわば「読み切り完結型」のストーリー性あるいは時事性を備えたものを用意することが望ましい。
- 前期の学科目の授業展開にあたっては、日常の演習作業とは別個に年二回の定期試験を加えて随時臨時テストを実施する。英語の実用的運用能力のみならず英文の読解力を習得する立場からも、豊かな英単語・語彙の知識がきわめて重要である。
- 前掲3) 聴解の指導 (16コマ) については、正規の演習形式の授業展開に加えて、学生の自学習の形式を導入し、L.L.カードの利用によって自宅作業時間(年間約150～200時間)を聴解技能の伸長に充当する。
- 年間を通じての週1コマ(1回)のクラス授業の展開は「生産性の低い」配置であり、学習指導の系統性と教授者サイドの責任の所在の明確化の立場から、それぞれの英語科目において同じ担当者が週2回年間50コマの授業を担当することが望まれる。

の一員として軽い連携プレイに従事するというシステムの採用が、より持続的であり、生産的であると言えるであろう。<sup>(注4)</sup>

以上のように、‘team teaching’に対する若干の試行の結果として、教授組織上の客観的な条件に左右されることもなく、一人の教授者に対してその実行可能性（facilities & Workability）を提供する ‘Individual Teaching’（一人教授）の性格を付与したのが、本稿の主張する教授法の特徴である。その基本的な性格に由来するメリットは以下の通りである。

**‘Individual Teaching’（一人教授）の意義：**

- 1) 教授法の一貫性——〈他の関連科目との整合性が期待できる。〉——
- 2) 教授内容の系統性——〈テキストの配置と進度調整が容易になる。〉——
- 3) 個性的な教授——〈教授者個人の演出力の発揮、合目的性を備えた魅力的なプログラムの作成が可能になる。〉
- 4) 責任の所在の明確化——〈科目担当者に責任の自覚が生まれる。Full Commitment。〉
- 5) 効率のよい授業展開——〈綿密な授業計画にもとづいて学習内容の定着性の強化をはかることができる。〉
- 6) 授業進度の調整——〈学習者の英語力のレベルにあわせて進度調整が容易になる。〉
- 7) 教授サイドの省力化——〈短期集中講座として学習項目の重点指導が可能になる。〉

このような言語教育に係わる系統的な指導法は、一見して単純明快な視点ではあるが、教育現場の諸般の事情に因り、その日常的な実行性の乏しい現状を考えると、そのworkability（実行可能性）の点で、教授面の便宜と高い学習効果を期待できるものと考え

る。



(2) 目標の明示と学習計画表——その事例——

学習計画表 (全10講) 〈英作文〉

—— 昭和59年度相愛大学人文学部英米文化学科「インテンシブ英語」(Compo. 英作文授業) ——

	学習内容と留意点〈和文を英訳する際の心得〉	実用英作文	アメリカ口語教本
1	単純化と削除 和文中の英訳しにくい語句は一定平易単純化をめざして別の日本語におきかえ、各自の英訳力の範囲内にこれを移しかえる努力をすること、さらに和文の意味上の不要な箇所を削除することも必要であり、その結果和文の主旨が明確となり、英訳しやすくなる。	P11~20	P1~7 (L.1)
2	主語その他を補う 日本語を英語にすると、まず第一に考えなくてはならないのは主語その他を補うということである。日本語は情報的な言語だから、何となく全体の感じで、だれが何を言っているのか悟らせるようになっているが英語は論理的な言語だから、ふつうきちんと主語がある。そのほか疑問詞やそれに類する日本語にないものを英語にするときも同様である。	P21~25	P19~27 (L.2)
3	前置詞のwithを用いて 和文英訳上大事な語法 (key usages) のなかでも with-phrase は動詞を修飾する副詞句として、付随する状況を示し、あるいは名詞を修飾する形容詞句を書く。継続的な状態やゆっくりした動作を表す分詞構文 (副詞句) で置きかえることもできる。英文中きわめて多い重要語法である。	P32~36	P41~49 (L.2)
4	擬人化と名詞表現 意志や感情や思考力のない物や事、あるいは身体の一部のような無情の事物をあたたかも意志・感情・思考力のある人またはそれに近いもののように考える表現法は、日本人であるわれわれにはなかなか作れない。また、日本語で何か名詞的に表現するものを、英語では be 動詞を用いた状態的表現で表す場合が多い。	P48~57	P63~71 (L.4) (P75~76)
5	Have+人+Root Have+物+p.p 文法上重要な表現の仕方である「have」を含む表現形式は、客外に使い慣れない人が多い。root(原形)は能動を表し、p.p.(過去分詞)は受動を示すので、その意味上の主語である目的語は左記の通り、それぞれ「人間」(事物)を表す名詞(相当語句)が来る。①使役(～させる; してもらう) ②受身(～させる)の意のいずれか前後の context にて判断する。	P94~97	P82~89 (L.4) (P96)
6	時制 英文を書くときには「時制の呼称(または一致)」に注意する必要がある。動詞の時間的関係を示す文法形式である種々の時制とその用法、複文中の主節・従節間の時制の一致、さらにその例外的な場合に特別の注意を払うべきこと。	P98~105	P98~107 (L.6) (P109~110)
7	推量と仮定 「助動詞 (must; might; should; would; could; ought to) + have done」の形が表す過去より現在に至る期間への推定、仮定、過去の可能性、仮想的推量、仮想的帰結; 過去の不変現の行為等、助動詞の用法とあわせて、英文中なかなか使用しにくい形(完了不定詞)である。仮定法の条件文との関係でも理解しよう。	P106~114	P119~128 (L.7)
8	Gerund 元来、動詞であったものが名詞になったのであるが、動詞の側面を有し、自らの主語・補語・目的語・修飾語句を取りうる。なかでも of+名詞+gerund の形に注意。また人の社会的地位、職業、能力またいろいろな物の機能、使用目的なども表すのに gerund を用いる。その他、gerund を目的語とする動詞群に注意する。	P115~122	P143~151 (L.8)
9	分詞構文 動詞のひたつてである分詞構文の文中の機能(副詞句)とその意味: 形と時制; その意味上の主語・独立分詞構文等(時・条件・原因・理由・譲歩・付帯状況等)のなかでも、2つないし2つ以上の動作が同時に平行して行われている場合を示す「付帯状況」の分詞構文はきわめて多いので、英語修飾の諸相のなかでも格別の注意を払うべきである。	P123~131	P164~173 (L.9)
10	その他の事項 ①複文中の位置: 名詞がききかた代名詞がききかた。②3人の人間を並列する順序③very と much ④hoped, expected, intended, wanted, wished 等+to have+pp. (実現されなかった過去の行為) ⑤現在完了と現在⑥質問文の not の位置⑦you had better do to ついて等。	P140~148	P186~193 (L.10)

(注)目標の明示——学習内容の定着化を第一義とし、毎回の授業を効果的に展開する上で、学習内容とその目標を学習者に事前に十分為すべきことの、「私」の特論を頼したものである。参考テキスト: Hints on Japanese-English Translation『HN 実用英作文』(大学生用テキスト) A.J.ハーバード/成田共著(英宝社刊)/アメリカ口語教本〈中級用〉(研究社刊)

高校英語(事例1) 学習計画表(全10講)

学 習 内 容	留 意 点	テキスト
1 態の書き換え (1) (2)	受動態の基本的な性格と作り方; 文型の移動。英語の受動態が、日本語では能動形の表現になりうる点など、日英表現の差異から論じる。	P2~5 〈第1課〉
2 不定詞の書き換え	不定詞の「不定詞」を修飾する基本的な意味の理解を通じて英文中に現れる「動詞」の形と用法を平易に解説する。	P10~13 〈第3課〉
3 分詞の書き換え (1) (2)	動詞のひたつてである「分詞構文」の文中での機能(副詞句)とその意味: 形と時制。単文を書く文法内容として取り扱う。	P18~21 〈第5課〉
4 比較と関係詞	関係詞の性格と機能をまず根本的に理解すべきこと。文中、被修飾文(関係詞)と修飾文において代名詞・関係詞の働きをもつ。	P22~24 〈第6課〉
5 動名詞の書き換え (1) (2)	本来、動詞に ing 形が付加されて、まったく名詞扱い(主語・補語・目的語)となるが、動詞的側面をあわせもつ。単文を書くものとして取り扱う。	P26~29 〈第7課〉
6 仮定法と命令法	英語の成文法の欠陥ともいえる「仮定法」の動詞の形と意味を解説する。高校生には理解しにくい文法内容なのでやさしく解説する。	P30~32 〈第8課〉
7 話法の転換 (1) (2)	人の言葉を伝える2つの方法(直接・間接)を中心として、文の転換の問題を取り扱う。総合的な文法力が必要とする。	P34~38 〈第9課〉
8 文の種類(構造) (1) (2)	単文・重文・複文・混合文と併にわける文章の構造と、それらを導く接続詞・他の文法内容を用いて、文の転換をこころみる。	P42~46 〈第11課〉
9 主語を中心に	形式主語の「It」、名詞・代名詞の特定の主語をふたえて英語らしい表現形式の英文に置き換える作業をすすめる。	P40~41 〈第10課〉
10 そ の 他	「動作」を英語の状態的表現で表すために、名詞を用いて、また種々の語句と動詞を含む書き換えをこころみる。	〈第2課・第4課〉

高校英語(事例2) 学習計画表(全10講)

学 習 内 容	留 意 点	テキスト
1 基本文型と語順	英語の文章構造、語順と倒置、英語修飾の諸相、英語の文章の特徴と日本語との差異等を豊富な教材を用いて理解させる。	P1~13
2 名詞と代名詞 および疑問詞	名詞・代名詞の種類と注意すべき用法; その所有格の意味(主語・目的語)関係を概説し、あわせて疑問詞の用法に言及する。	P17~22
3 関係詞	関係詞(代名詞・副詞)の基本的性格の理解と具体的な訳文作業を通じて応用力を身につける。	P23~27
4 動詞	動詞の時間関係を示す文法形式である。種々の時制とその用法および受動態の基本的な性格と作り方をやさしく解説する。	P37~42
5 助動詞	注意すべき助動詞の用法と、とくに助動詞 (should; must; etc.) + have + p.p. の形を取り扱う。	P43~46
6 準動詞 (1)	不定詞・分詞・動名詞の総称。その動詞的側面は名詞・形容詞・副詞の側面を取り扱う。	P47~51
7 準動詞 (2)	不定詞の「不定詞」と称される基本的な性格、分詞構文の文中での機能(副詞句)とその意味、それらの意味上の主語が導くネグレクト関係に留意する。	P52~59
8 仮定法	話者の心理を伝える動詞の語形変化に表れる表現形式(なかでも英語の成文法上の欠陥ともいえる「仮定法」について平易に解説する。	P60~63
9 句と節	2つ以上の語の集団である意味上の一単位。さらに S+V の形式を備えているもの、それれぞれ名・形・副の働きをする句・節を取り扱う。	P64~68
10 文の構造	構造からみた文の種類(単文・重文・複文)とそれらを導く文法内容・とくに接続詞に対する理解を深め、文の転換をこころみる。	P69~73

(注)目標の明示——授業を展開する際に、長期的に、かつ短期的に学習内容・目標が明示されるべきは、教育の原理からして自明の理と解されているが、現場においてこの原則が鋭意実施されることは少ない。学習内容の定着性を第一義に重んずるとき、目標を明示し学習時間の効果的な運用を計るべきである。参考テキスト: 「Rewriting Seminar」(高2・3年用); 高校英語研究会(山口書店)/「新総合英語演習(応用編)」: 木戸・上山共著(山口書店)

### (3) 外来語に学ぶ

1981年10月26日初版の「英米外来語の世界」<sup>(注5)</sup>の刊末に収められている‘外来語研究文献目録’ (P.226～P.278) のなかに、明治元年1月より昭和54年12月末に至る期間に刊行された総計1,003点にのぼる外来語についての研究資料および記事が掲載されている。その所収は「著書の部」・「論文の部」・「新聞(記事)の部」の二部門に分けてそのタイトルが収録されており、数えるとその内訳は著書187点(昭和以前の出版物25点、昭和3年以降昭和54年までのもの162点、計187点)・論文485点・新聞の記事456点であった。

この三部門に互る総計1,003点の書名・タイトルを綿密に読み取ると、その記事内容の性格と‘外来語’の取り扱い方に対する著者の主張がみえてくるのは、まことに興味深い。「著書の部」における圧倒的多数を占めた‘外来語’そのものの研究と外来語に関する辞典類をのぞいて、この三部門の記事内容には三つのテーマ性・特徴が存在することを認めた。本稿の執筆者にとって、主たる関心事となった諸点を項目化すると、(1)日本語のなかの外来語(2)日本語に及ぼした外国語の影響、あるいは(3)英語(語法)の国語に及ぼしたる影響(4)外来語の音韻(発音)と表記法(5)外来語の濫用に批判的な記事(6)外来語同化に肯定的な記事(7)西欧諸国における外来語の受容の在り方を取り扱った記事(8)英語教育と外来語に関する記事などであった。なかでも、外来語の是非・功罪を論じ、言わば‘暮らし’に溶け込んだ外来語の使用を認容する立場と、その濫用に因る日本語の‘乱れ’を憂う現状批判の立場を両極として、その取り扱い方の多様性と今日の国民の関心のレベルからして予想外の関心の拡がりが存在することを認めた。さらに、日本人の外来の言葉に対する包容力あるいは摂取能力と西欧諸国(英・独・仏)の受容性とを対比するなかで、とりわけ外来語の使用を制限する立法措置を構じたフランス人の国語純潔主義あるいは自文化純粋主義の姿勢は、‘ことば’の問題にとどまらず、その背景に在る民族の文化的価値観の顕れとして、外来の異文化理解の態度と相異を提示する含蓄のある視点であると考えられる。

1950年(昭和25年)以降1970年(昭和54年)までの‘外来語’に関する記事計486点を、朝日・毎日(各東京・大阪)・読売等の最大手紙を含む各種の新聞23紙が掲載していることを、この文献は伝えている。その内あきらかに‘外来語’に対して肯定的な内容をもつ記事が8点であるのに対して、外来語批判の立場をとる記事内容は69点を数えるが、この事実は、おびただしいほど多量の外来語を受容する日本語の現状に対するマスメディアを中心とした有識者の見解がどこに在るのかを如実に物語っている。この後者の外来語批判の矛先は、「外来語汚染説」<sup>(拙訳)</sup>(Language Pollution)<sup>(注6)</sup>として、日本語のなかにますます加速される外来語の混在・濫用を戒める立場と、日本語による外来語の音韻(発音)と表記法の不安定さ(ゆれ)をきびしく批判する立場のふたつに集約されることが、その表題の分析の結果判明した。このこともまた、問題の核心の位置がどこに在るのかを正確に教示している。

つまり、外来語の表記法を簡易にすることの‘難しさ’と国語の本質に係わる重要性が、今日まで事態を一層複雑にしてきた、と言わざるをえないのである。後者の‘外来語’の表記法（表音記号）を取り扱った記事のなかで、もっとも影響力を及ぼしうる機関が1954年その部会報告にはじまる‘外来語の記述の仕方や標準語の方向’を願した国語審議会の答申内容であった。<sup>(注7)</sup>

一方、日本語のなかの外来語の混在を日本文化の体質の一端として、あるいはそれを強化する要因として肯定する立場からは、日本語に及ぼした外来語の影響を指摘し、日本人の二重の言語生活を現実の問題として肯定し、外来語の濫用を避けその正用法を訴える主張が支配的であった。なかでも、今日の英語教育と外来語との接点をもとめ、英語学習の‘動機づけ’ (Motivation)としてのひとつのアプローチを外来語の存在にもとめる一部の積極的な視点が、執筆者にとってもっとも関心のひくところであった。

古来、文語文のひとつとして、漢文訓読体に和文の性格が加わった‘和漢混淆文’や平仮名・片仮名の発明をした日本語の歴史は、生得的に日本語が外来の要素の混淆によって成立したことを教えている。今日わたくし達日本人が日常的に文字言語および話し言葉として用いる、英米を中心とする西欧諸語から借用した‘外来語’の使用語彙数は、驚くほど多い。なかでも英語からの外来語の語彙数は、おそらくは全外来語のうちの90パーセント内外を占めていると言われる。<sup>(注8)</sup> 世界でもっとも広い実用性を備えた国際語としての英語から移入摂取される外来語が圧倒的に多いという事実を考慮に入れるとき、日本語のなかの外来語の存在は、英語学習に有効な手掛かりを与えてくれる、と考える。英語からの外来語の流入は、日本語だけの特殊な現象ではなく全ヨーロッパ的な拡がりをもっているところから、外来語研究家の荒川惣兵衛氏は、その大著「外来語辞典」<sup>(注9)</sup>のなかで、仮説として外来語について将来の‘国際共通語’としての可能性を指摘しておられる。外来語がひとつの民族の国語にとって代ることがありえないとしても、時代の要請として国際間の文化的人的交流が拡大するにつれて、それぞれの国語のなかに共通の外来語が今後ますます増加しつづけ、なかでも国際語としての便益性を備える英語が多量に摂取されることは回避できないことであろう。

この外来語が移入された時期は、日本と西欧諸国との交渉がはじまった時期と軌を一にしており、その流入の方向は文化程度の高低や必要性がその決定要因となり、外国語を通じて新しい思想、文化、事物に接し、自国語のなかに対応すべき用語が存在しない場合に、必要上移入摂取される。したがって、その分野は医学、薬学、文学等の学問や科学をはじめ、政治、経済、芸術、料理、服飾、スポーツ等専ら文化に関する語彙の中に現れることが知られている。‘ことば’の流入・流出に関する日本と西欧諸国との関係においては、一貫して日本側の一方的な移入の歴史であった。

このおびただしい数量の外来語を日本人が一見無抵抗に、あるいは積極的に摂取移入す

る心理を取り上げ、それを前稿のなかで日本人の言語意識の一端を表すものとして言及した。<sup>(注10)</sup>つまり、外来のものに対する包容力、旺盛な文化的吸収力を、日本語および日本文化の特質とみなし、なかでも日本語は、外国からは‘ことば’を借用する上で、世界でもっとも吸収力の強い言語であると指摘する傍、他方では異質な文化や外来語を受容することによって、日本人固有の‘情緒’が損傷されることの危惧は皆無であり、換言すれば国民の大衆レベルにおいて、‘ことば’に対する日本人の言語意識は感覚的であり、便宜主義的であると断じた。それは、外来語のもつ高級感、優雅さ、快い音感などが人間の感覚を刺激し、無意味で不可解な外来語のもつ権威が却って欲求心を誘発する言葉として受け取られるために、ものごとの‘周辺の雰囲気’を格好よく伝達する一種の「便宜語」と言うべき存在であると考え。いわば日本語の音声言語としての好音作用（Euphony）の生産要因のひとつであるために、今後とも便宜上‘ことば’の感覚化と音声化がますます進展すると考えられる。この点でも外来語の流行は日本人にとっての‘ことば’の文化現象のひとつであると考え。

外来語氾濫の時代と称される、日本人の外来語受容の態度は、今日その是非を論ずる段階を越えて、‘外来語の文化’の成立を万人が是認せざるをえない域にまで達している。これを日本語の‘乱れ’として排斥するのではなくて、外来語の正用法に対する理解を敷衍すると同時に、日本の文化の特質に帰属すべき問題性として捉えるべきである。なにごとにも省エネ型に‘ツメ’（詰め）を急ぎ、問題の本質や解決方法を手っ取り早く求めようとする、通俗的には日本人の生活の知恵の所産であり、このような外来語と固有の日本語との混在に殊更に異和感をもとめない包容力は、国内外の異文化、多様な思考様式や宗教をも含む精神性を併呑し、吸収発展させる潜在力の存在を示唆している。まさに、古代以来の日本人の異文化理解の‘しずかな’（invisible）態度あるいは方法論が隠されているのではないかと考えるのである。

今日まで「外来語の研究」は日本語の研究の範疇として取り扱われてきたのであるが、本稿の執筆者の立場では、昭和40年以降久しく日本語のなかの外来語および和製英語の問題に対して相当の関心を寄せ、日本人の英語学習者に対する‘興味づけ’（Motivation）の有効な素材として外来語を取り上げ、幾多の教材化と授業実践を試みた。下記の教材はその一例である。

## 1) 外来語の特徴

	外 国 語	日 本 語
1) 語尾の脱落——英語の正用法でない語尾の省略 (～ing, ～ed, ～s, etc.)——	例 { frying pan mashed potato stockings	フライパン マッシュポテト ストッキング
2) 意味・用法の変化 (拡大と限定)——拡大と限定／狭義に解釈される傾向大——	{ iron「鉄」 albeit「(独)『仕事』」 cunning「するい」	アイロン「ひのし」 アルバイト「内職；副職」 カンニング「試験時の不正行為」
3) 品詞の転用——名詞化現象——	{ avec「(仏)『と共に』(前)」 announce「放送する」(動) signature「署名する」(動)	アベック「男女の同伴者」(名) アナウンス「放送」(名) サイン「署名」(名)
4) 複合語の形成——英語に存在しない造語——	{ office girl motorbike air conditioner	オフィスレディ オートバイ ルームクーラー
5) 語形の省略——大幅な省略と短縮——	{ Albeit「(独)」 apartment house Inflation	バイト アパート インフレ
6) 外国語の合成——二つの異なる外国語の組み合わせ——	{ Albeit「(独)」+salon「(仏)」 Thema「(独)」+song「(英)」 pizza「(伊)」+pie「(英)」	アルバイトサロン／アルサロン テーマソング ピッツアパイ
7) 長音節——母音の付加を伴う——	{ text「tekst」(1音節) strike「straik」(1音節)	テキスト【te-ki-su-to】 (4音節) ストライキ【su-to-ra-i-ki】 (5音節)
8) 音韻の変化と消失——原音に近い日本語の音韻体系に合わず。綴り字発音。——	{ 上記の外国語の事例。 英語の閉音節が日本語特有の開音節 (子音+母音) にかわる。	

## 2) 外来語教授の視点と意義

- 1) 日本語のなかの外来語——外来語そのものの意味
- 2) 外来語の特徴——その語形成と音韻 (表記法)
- 3) 外来語の語源——その歴史と移入経路 (文化交流史・異文化理解)
- 4) 外来語の意味と変化—— { 外来語 (英語) の正用法 (正しい綴り字と意味)  
英語と外来語の意味のずれ (相異)
- 5) 外来語の機能—— { その存在と意義 (実用主義と便益性)  
表音文字化 (簡体文字)
- 6) 外来語と英語学習——‘興味づけ’の方法論
- 7) 母国語への関心——日本語の特徴と成長 (表現力の豊かさ)

## 3) 外来語教授の教材 (一例) (拙稿) ——昭和59年度相愛大学音楽学部入試問題 (英語) より——

- 下の日本語を読んで設問に答えなさい。

N氏とはアメリカ女性のヘレンさんを妻にもつ、いまマスコミ界で売れっ子の<sup>(1)</sup>コメディアンと同姓同名の西川きよし氏のことである。高校を出てから日本で有数の自動車産業N社に勤めて、はや10年の<sup>(2)</sup>キャリアを持つ有能な中堅の<sup>(3)</sup>セールスマンである。彼は、けさも<sup>(4)</sup>チャーミングな愛妻といたづら盛りの息子に見送られて家を出た。自社のベスト・カーと自認するブルーバードUに乗って毎朝ハイウェイを飛ばすオーナー・ドライバーである。

いまの奥さんとはテレビの番組パンチDE<sup>(5)</sup>デートに出場して、激しい恋愛の結果めでたく<sup>(6)</sup>ゴールインしたのだが、以来家庭を大事にするマイホーム主義者でもある。家を出て10分もすると、ハンドルを握りスピードをあげながら、今月のセールスのことや会社のディーラーや<sup>(7)</sup>ユーザーのことを考える。自分のノルマを確実に果して年末の<sup>(8)</sup>ボーナスを最高額に獲得したい。車を一台売買することに<sup>(9)</sup>マージンやコミッションも手に入る。仕事はハードであるが、2年前長期の<sup>(10)</sup>ローンで購入した3LDKのマイホームの払いのことを考えると文句は云えない。

しかし最近つくづく考えることがひとつある。それは仕事の上で外国語の言葉がやたらに多いことである。日本車の優秀さが外国で認められ、技術が輸入されたせいもあるが、そもそも車名や車の<sup>(11)</sup>パーツは大体外国語で、仮名で理解するだけでは間に合わず、<sup>(12)</sup>ヴェテランともなれば、専門知識だけでなく英会話までも学習することを会社が要求するようになってきた。なによりも<sup>(13)</sup>プラクティカルな英語がものを云う時代になってきた。こんなことなら高校時代にもう少し英語を勉強しておけばよかったのに、と後悔する。ホームルームの後方の席でよく<sup>(14)</sup>カンニングしたものだが、よく叱られたあの<sup>(15)</sup>ハンサムな英語の先生をいまでも思い出す。

いつも思うことだが、今日の日本語には、いたる所に外国語が顔を出す。『けさも<sup>(16)</sup>トーストとミルクの簡単な朝食を取りランチには、ハンバーグとサラダそれにコーヒをブラックで…』と云った具合で、女性のファッション界は勿論、化粧品や薬品から、カップ・<sup>(17)</sup>ヌードルとかの食糧品にいたるまで、日常生活が外来語であふれていることに気がついた。

はいい話が自社の誇るブルーバードにはじまり、グローリア、プレジデント、スカイライン、プリンス、ギャラン、<sup>(18)</sup>エクセレント、<sup>(19)</sup>ファミリアー、サニー、チェリー等日本の車の大低がハイカラな外国語である。なぜ日本製の車が外国語名でなければならないのか、と日本人の愛国心の無さと外国趣味をときおり嘆くのだが、いま思い付く外来語を日本語で全部言い直しかけて、その不自然さに驚いて止めてしまった。日本語からもはや外来語を取り除くことは出来ないのである。

快いカー・ステレオから流れる<sup>(20)</sup>ポピュラー音楽に耳を傾けながら、アクセルを落

した。あの高いビルの手前のコーナーを右手にターンすると自分のオフィスは目と鼻の先きだ。左手にセブンスターを取り出して火をつけた。さあ今日もその一日がはじまるのだ。

設問 (1) 上文中の下線部の外来語、あるいは和製英語について、本来の英語の正しい綴字を解答欄に記しなさい。(計20単語)

#### (4) 日英表現上の差異

母国語と言語構造がまったく異なる英語を日本人の学習者に教授する、もうひとつの視点は対照言語学上の立場から日英両語の表層構造の相異に基づく比較である。日英両語の表層面に現れる差異や類似を理解することは、目標言語である英語の学習を進展させる上で、‘Motivation’の観点からも有意義であり、かつ英作文とリーディングの授業を進める上できわめて効果的である。

例えば、後掲の資料文(2)とその邦訳を対比することによって、日英両語の語順の固定度がまったく異なることが分る。語順の固定していない、あるいは緩やかな日本語の構造は、和文を一見するだけでは、その全体の意味内容は視覚的に捉えにくい。したがって比較的長い和文を読んでいる際には、その文構造を視覚的に捉えているのではなくて、和文を構成する個々の情報単位の‘意味の関連性や連続性’が読者の文意把握を助けているのである。こうした日英両語の表層面の相異は、文章の語順にとどまらず、表現および文化の差異に及ぶものであり、まことに興味深い、と考える。以下の教材は、「インテンシブ英語課程」の授業構造に位置づけられた「Compo. (英作文)」の授業展開の上で、‘日英表現上の差異’と題し提示した教材である。(資料3)

#### (資料文2)

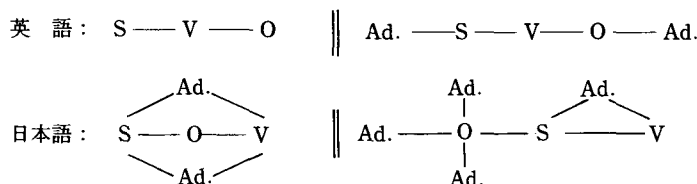
When (I was) a child, I often dreamt a happy dream of a nice prince, who came up all the way to meet me as his partner, riding on a white horse, with a wide hat on. (拙文)

●邦訳(大意訳)「つば広の帽子を被り、白い馬にまたがって、素敵王子さまがわたしを良き伴侶として迎えるためにやって来る、そんな楽しい夢をわたしは子供のころよくみたものだ。」

●日本語の統語法：その特徴としての前置修飾の例文。

つば広の帽子を被って 白い馬にまたがって わたしをパートナーとして迎えるために 連用句(副)	→	(はるばると) やって来る 連体節(形)	→	(素敵な) 王子さまの 連体句(形)	→	(たのしい) 夢を O(目的語)	〃〃
わたしは	〃〃	{ 子供のころ } S(主語) 連用句(副)	→	{ (よく) みたものだ。 } V(動詞)			

●日英両語の語順の固定度〈図解例〉



日英両語の統語構造の差異については、いろいろな立場における比較の仕方が存在するが、上記の日英両語の簡単な例文を検討することによっても、表層構造のみに基づく比較が可能となる。例えば、日英両語の「語順」の固定度の相異や、日本語における動詞の前に位置する目的語や副詞相互の語順関係が比較的ゆるやかである、ことが理解できるのである。

日本語の語順が固定していない事実から、日英両語の表層構造の比較はあまり意味がない、という解釈も成立するが、本稿の立場においては、それでもなお、学習者に対して日本語と目標言語である英語の構造上の相異や類似を視覚的な形で提示することによって、教材の作成、学習指導面の「興味づけ」や教場における教授技術などに有効な基礎的資料を提供するものとする。

（資料 3）

学習計画表〈全20講〉

英作文の心得 〈日英の表現上の差異〉 —— 昭和59年度相愛大学人文学部英米文化学科「インテンシブ英語」(Compo. 英作文授業) ——

英 文 の 特 徴	要 点	英 語 文	日 本 文
1 主語その他を補う	日本語＝論理的な言語／英語＝論理的な言語。主語、冠詞その他を補うべきこと。	I'm afraid he won't be able to see you this afternoon.	きょうの午後はお会いできないと思います。
2 英語の語順	英語の文法型。英語には助詞がない。英語では語順が大事。	I saw a snake crawling away in the grass.	私はへびが草の中へはいって行くのを見た。
3 テンズのずれ	日本語のテンス＝過去と現在を中心に。英語と日本語とのテンスのずれに注目。	Modern Japanese have become quite watermazed.	今の日本人はすっかり西洋風になりました。
4 肯定・否定が逆になる	日本語の肯定・英語の肯定表現 (before; keep from; far from: 比較級・最上級等) で表す例。	She was wearing the most beautiful ring that he has ever seen.	彼女は彼が見たこともないような美しい指輪をはめていた。
5 否定詞先行	日本語の文中の否定詞の位置の差異。「～しないと思う」「～～するとは思わない」(英)。	I don't think he would sleep well tonight.	今晚は彼、よく眠れないと思いますよ。
6 状態的表現	日本語の動詞的表現→英語の状態的表現 (英) be + 形 (名・動) → 動作を表す。	Mrs. Ford has been dead for three months. She is a good cook.	フォードさんの奥さんがなくなってから3か月になる。彼女は料理がうまい。
7 能動・受動が逆になる場合	英語の方が日本語より受動を多用。英語の受動文を日本語で能動的に訳す場合。	He was killed in the battle.	彼はその戦いで死んだ。
8 無生物主語の活用	無生物主語は英語らしい表現。日本語では副詞的に表現するよう多くすることが多い。	His story reminds me of my childhood.	彼の話を聞くと私は少年時代をおもいだす。
9 動詞的表現を英語では名詞的に	日本語＝動詞中心の言語／英語＝名詞中心の言葉。英語の「be + 名 / V + 名」の形。	They gave us a most hearty welcome.	彼らは本当に心から喜んで私たちを迎えてくれた。
10 動詞を前置詞であらわす	日本語の動詞的表現 → 「be + 前置詞 + 名詞」へ。	She is not in love with Bill any more.	彼女はビルをもう愛してはいない。
11 名詞を修飾する語形式	英語は名詞中心の言語＝名詞を修飾する形容詞・分詞・関係詞等 (句・節)。	There are many people called Smith in the United States.	アメリカにはスミスさんという人が多い。
12 単語の意味範囲	日本語と英語とでは単語の意味範囲がちがう。誤用された英単語の例。	Harry described himself as a big time Chicago gangster.	ハリーは自分のことを全盛期のシカゴのギャングだなどと言ったが、それもうそだった。
13 英語では省略できるもの	日本語を英訳するときには、一字一句訳さないで省いた方がよい場合。日本語独特表現の省略。	If you don't believe me, look (at it) for yourself.	私の言うことを信じてないなら、自分で見てみなさい。
14 英語では補足が必要	日本語を英作する場合に、他に数語を補足した方がよい場合。	I don't have any money about me.	ぼくは金を持っていない。
15 英語のくせ	日本語の長文を英語の短文を重ねて表す例。	May I speak to Mr. Brown, please? Is he (at) home?	ブラウンさんにお話ししたいんですが、ご在宅ですか。
16 英語は立体的	英語修飾の語句が、長い英文をつくる。英文中の付加的表現形式。	It is advisable to take a trip when you are young.	若いうちに旅行をするのはよいことです。
17 副詞節のいろいろ	英文特有の副詞節を正確に理解すべきこと。	Tastes vary as one gets old.	年をとるにつれて好みは変る。
18 補語の活用	補語のいろいろ：名・形・分詞等。不完全動詞のいろいろ。	She looked quite shocked at her father's death.	彼女は父親の死でショックを受けたらしい。
19 代名詞の名詞	英語は代名詞が発達している。名詞を代名詞のかわりに使うこともある。	"He is still alive," I said. "He is alive?" replied my companion.	「彼はまだ生きています。」と言った。私の伴者が「彼は生きていますか?」と答えた。
20 英語のニュアンス	英語表現の多様性。	Can we expect you at ten o'clock? Will you come at ten o'clock?	10時においでになるんですね。——

(注)対照言語 —— 英文の構造を理解させる上で、日英両語の文章構造・語順などの点で言語間の差異を適確に指摘し、英文の特徴を要領よく理解させる必要がある。「日英表現上の差異」と明示し、学習内容の定着を第一義に図り、学習目標を明示する意図をもって、「参考テキスト」を全20講用として学習計画したものである。参考テキスト(大学生用):「How to write English」(英作文—日本語とのちがいを)昭.59.10.1 朝日出版社刊



## (5) 教師像とその周辺

教育の思想性ではなくて、教師の思想性がいま問われている。——昭和30年代の初頭技術革新にはじまる日本経済の高度成長の過程を通じて、その後国民生活の一定の質的量的拡大が実現された。生産部門におけるロボットの登場は、労働者大衆の第一次的な生産労働からの解放を果し、圧倒的多数の人間が第三次産業へと質的転換をせまられることになった。同時に、戦後十数年の‘生活の糧’を確保することに向けられていた市民的関心は、より豊かな明日の生活を保障するものとしての教育の拡大にその投資の対象をもとめた。日本の高学歴社会の体質とあいまって、国民教育の質的量的拡大は国家経営の方向のなかに位置づけられ、労働力の質的転換と量的拡大をもとめる日本の産業界の要請を受け入れ、日本政府は戦後教育の見直しとそれに伴う諸制度の改革の措置を構じた。

こうした日本の経済社会の構造変化と拡大に伴う多様な価値観の存在と、経済至上主義的価値体系の産物としての生活リズムの高速化、さらに競争社会の存在は、人間の他者からの疎外を生起せしめ、そのことに因って人間の共同体の一員としての連帯感の回復を挫折させ、国民が伝統的に備えてきた倫理的基盤を崩壊せしめ、人間相互を疎外者として積極的に位置づける生活信条が拔扨するという現実を産んだ。こうした道徳的価値の低下は、家庭における人間関係とその伝統的意味概念の変容をもたらし、なかでも、この家庭の崩壊と、その結果としての学校教育への過度の依存は、皮肉なことに、学校教育と教師の機能の限界を創出することになった。

教師の教場で対面するのは、学習者としての善意にみちた昔日の生徒ではなくて、自らの家庭を崩壊されたことに因る敵意にみちた未熟な小動物としての姿を、ときとして現すことがある。現場における教師たちが、教科を担当する‘the teacher’の職域を大きく飛び越えて、専ら生活指導を担当する‘the case worker’‘the counselor’としての機能が圧倒的にもとめられる時代になった。

学校現場における教授者の立場もまた自己矛盾と苦渋にみちた存在である。学習者にとって、独立達成志向を疎外する幾多の要因を内包する、日本の学校の教育条件を背景にして、一クラス30人以上の学習者が構成するクラス授業の展開は、管理教育あるいは追従達成型の一斉授業をせざるをえない状況を産み出している。また学習者の背景には、功利主義的な時代思潮と絶対者の存在を否定した戦後社会の民主的秩序と基盤の成長があった。拡大した民主主義に根ざした権利意識の過剰な高揚は伝統的な教師の權威の崩壊をもたらし、他方国民の生活意識の変化、多様な価値観と生活スタイルなどを微妙に反映している現代の‘時代の申し子’としての学習者の存在があった。抗しがたいほどに規格化されたリズムとスタイルを強制する学校社会のなかで、自己拡大したいと願う一人の教師は、魅力ある教師像としての自らの存在を見出しえず、学校社会の日常性をもとめる随性のなかに埋没する危惧をたえずおぼえるのである。今日の教育の問題性は、戦後社会の進展に伴

う幾多の矛盾の複合体としての当然の帰結であり、それは人間の共存的存在の“原理的なもの”の崩壊の産物である。それは戦後社会の、そして今日の民主教育のディレンマであり、現場に立つ教師のディレンマでもある。

今日の教師の理想像は、その思想性においてアルセストの人間像<sup>(注11)</sup>でもなければ、「美」を追求するニヒルな趣味の審判者〈ニル・アドミラリ<sup>(注12)</sup>〉あるいは知的観照者であってはならない。まして聖職者の「静謐」にみちた悟りの生活者であってはならないのである。それは、むしろサルトル的人間像であることが今なお望ましい。産業社会がもつめる没個性と管理社会、多様な価値観とモラルの変容、競争社会と高速化された生活リズム、豊かな社会がもたらすアイデンティの不在などによって特徴づけられる現代社会のなかに生きて、教師は自らの周辺にたえずアンガージュし、革新の人間社会を模索し、自らも自己革新と拡大意欲に燃えた魅力的な人間像でなければならない。なによりも、人間に対する関心をもちつづけることが前提である。

学校教育の下における外国語学習の問題性は、たんなる技術の習得ではなく、学校社会全体の枠組みの中で捉えなければならない。とくに、生活言語としての実用性をほとんど欠落させている日本人の学習者の存在と、その反映としての英語教育の現状を考慮するとき、この感を深くするのである。究極的には、学習者が生活の自律性と自己教育力を獲得することが、日本の学校教育における外国語学習の目標のひとつである。

#### (6) 教学上の指導措置

昭和49年6月阪神地区の教研集会の席上自らの授業研究の一端を報告した兵庫県立高校の一人の英語の教員から、つぎのような主旨の発言があった。「自らが毎時教室にはいるときには、しっかりした足取りで廊下を歩き、教室のドアを勢いよく開け、自らの身体を正面に向けながら自らの顔面を斜め方向の生徒側に固定し、あきらかに不自然な姿勢をして教卓に向い、自らの眼鏡の奥に笑いのない真面目な表情をつくって、生徒全員の前に立つ。そのことによって、クラス全員の爆笑をかうのである。」また、別の英語教師は、毎月少なくとも一度は大阪市北区に在る梅田花月劇場に通い高座の真前に席を占め、落語家や漫才師よりその話芸を学びとる、という。巷間に今日の教師の資質を数え上げて、‘学者肌、医者肌、役者肌あるいは芸者肌、落語家肌云々’とあるは言いえて妙である。それは、‘Motivation’の方法論のひとつとして、教授者と学習者との間のソフトな人間関係を演出し、‘遊戯性’のある授業を展開するという効果的な演出の必要性を指摘するものであろう。

授業開始の直前あるいは直後のクラス授業の雰囲気づくりのために BGM(背景音楽)を利用することは、‘遊びの感覚’を学習活動にもちこむ授業展開の上できわめて有効な方法である。学習者が持ち合せる多様な生活条件や学習者自らの体調や気分がクラス授業

全体の雰囲気投影することによって、いわば学習者の積極的な参加が期待できるか、それとも教師主導による追従達成型の単調な授業展開に終始するのか、授業の冒頭における教授者の創意にみちた試みは、その授業の成否を決定づけるほどに大きな影響をもつものである。

クラス授業を学習者と教授者の合意された目標へ向けての協業の場と位置づけるならば、学習行為のイニシアティブをとるべき教授者サイドが積極的に仕掛ける演技的要素は、‘たのしい授業’を成功裏に展開する上で、教授者のネア力な魅力ある人間像とあいまって、教師の資質にも係わる大事な要件である。とくに授業の冒頭における‘ハプニング’の有無はクラス授業の雰囲気づくりに大きく影響すると考えられる。

本稿の立場では、クラス授業のよい雰囲気づくりと、学習者の容易な理解と学習内容の定着性を高めることを大前提にした、具体的な教授法上の‘仕掛’(Strategies)をたえず模索してきた。それは、授業開始時のBGM(背景音楽)の利用、音声指導と実用主義にもとづく授業展開、目標の明示と学習指導の計画性、授業時間の多段階利用、視聴覚教材・教具の広範な活用、毎時の演習作業の重視とテストの配置等の教学上の措置を構成要件とし、教授者による授業全体の構合力、その効果的な演出を重視する立場であった。

昭和38年より昭和53年までの15年間に互る現場の教職生活を通じて、本稿の執筆者が授業実践に真摯に取り組み、まさに‘The teacher’の職域を越えて機能した仕事は多岐に互るが、その間たえず座右の銘として、平常の授業展開の上で強い関心をもって構じた教学上の措置および留意事項は以下の通りであった。

#### I. 授業内容とその進め方について

- イ 板書すべきこと。
- ロ 進度を遅らせること。
- ハ 反復して教授すること。
- ニ 易しい表現・言葉使い。
- ホ 質問を喚起すること。
- ヘ 理解度と定着性を確認すること。
- ト 生徒の作業(ドリル)を導入すること。  
ー教材の作成・管理プーリングセンターー
- チ 毎時間とも重点的にポイントを押さえること。
- リ 次の授業へのつなぎと、欠席者に留意すべきこと。
- ス 教材教具の導入をはかること。
- ル 教材の選択の在り方。ー教科書の再検討ー
- ヲ 教科問題研究会の開催
  - ・視聴覚教具の案内
  - ・授業内容の検討
  - ・テスト問題の有り方の検討

#### II. 欠講授業について

- イ 自学自習態勢の整備

### インテンシブ英語試験〔3〕

- ロ 課題の準備（プリント等）
  - ハ 振り替え授業—スマートな実施法検討（職員の年休権の公使）—
  - ニ 生徒への連絡の徹底（教務用告知板・学年用告知板）
  - ホ 職員の欠勤の確認方（校長・教頭を含む）—おたがいのために—
- Ⅲ. 生徒に要求すべきこと
- 授業について：—わかる授業をしてもらうこと—
- イ 質問すべきこと。質問を通じて教師との対話を求めること。
  - ロ 理解できないときは「わからない」と教師に訴え、再度説明を求めるべきこと。
  - ハ 生徒自ら、理解できるように、わかるよう努力すること。
  - ニ 授業中の私語はか—生徒相互に注意すべきこと。
  - ホ 授業中の生徒のマナーについて教師の注意は是か非か、ホームルームで討議し、クラス内の合意を取るべきこと。
  - ヘ 生徒は何の目的で学校に来るのか、『学習すること』の意味を再検討すべきこと。
  - ト 授業には関心を持ち、熱心に傾聴し、教師との間に信頼関係を持つこと。
  - チ 何故欠席が多いのか。—その原因を個人的に語ること—

昭和59年より以降本科完成年度まで、さらに平成2年度まで本学英米文化学科のカリキュラム上「Audio」「Compo」(聴解と英作文)・英語-Iの授業担当者として構じた教学上の措置はつぎの通りであった。

- (1)生活指導と進路指導(ガイダンス・オリエンテーション)の実施——昭和59年度英米文化学科I回生を対象に4月～10月期に計5回実施した。
- (2)共同生活体験学習(フレッシュマン・キャンプ)——昭和59年度英米文化学科I回生を対象として同年7月中旬2泊3日の日程で、和歌山県加太海岸国民休暇村で実施した。
- (3)通訳実習体験(ボランティア通訳)——昭和59年度英米文化学科II回生を対象として実施。  
1985年ユニバシアード神戸大会ボランティア通訳募集に本科として集団応募、参加者28名。さらに同年9月、大阪府善意通訳募集(Good-will Interpreters)に応募者19名を出す。
- (4)Study Skill(学習指導)——学習行為における自立志向とMotivationの観点から、昭和59年度以降本科生を対象として、英語・英米文化の専攻生として利用すべき英米文化学科必携ガイド(研究社出版)を含む基本図書(Essentials)の紹介、卒論の書き方関係資料と参考文献のリストアップ、各種機関の利用の仕方、一般の読書案内(能力開発センター提供)、各種資格試験案内、海外語学研修情報の提供、実用語学書約200冊の選書リストアップ・学生配布等を、授業内外のガイダンスの場を通じて鋭意実施した。
- (5)情報サービス・センターの設置〈インフォメーション・センター〉——昭和59年4月人文学部発足当初より、海外研修・留学情報、国際交流・留学生との交流活動、語学専修学校・外国語講座、語学力検定試験・各種資格試験案内、就職アルバイト情報等の多様な情報を収集し、約4年の歳月を費して昭和62年11月整理完了、本科合同研究室に設置した。
- (6)ブリーング・センターの設置：「インテンシブ英語コース」履習者の英語学力の向上については、周到に用意された継続的な言語テストを実施し、総合的、個別的に評価分析し、その到達度に即応した言語材料の配置、系統的な指導法の確立、学習内容の定着性を重視した授業の展開、とりわけ演習形式の重視等を通じて具体的な学力の向上を図った。語学教育の科学的、系統的指導法の確立と指導内容の一貫性については、それを具体化するものとして、精選された教材の配置、ブリーング・センターを学科内に設置した。
- (7)言語テストと定着確認作業：学科目の授業展開にあたっては、原則として毎回、学習内容の定着性を第一義として効果的な課業あるいはテストを実施し、英語の豊かな語彙の獲得に最大限の措置を構じた。

事例1——〈旺文社刊：英語重要熟語4,000〉：テキスト各5ページ毎に、事前に用意された一定の形式と内容をもったテストを、毎回の授業終了時10分間を利用して実施するもので、英文中の重要な語句と meaningful な短文を多量に理解し記憶することを目標とする、通年の短期集中学習である。全80回の問題とテスト計画表(範囲)の作成は配備済みである。

事例2——〈開拓社刊、語学研究編：Active Vocabulary(基本英語一千語)〉：Dr. Harold E. Palmer によって精選された英単語約一千語(内、基本動詞425を含む)、英米人が日常の生活に利用している一千語内外の基本語彙(高等学校の英語学力の最低基準)より成る、易しい短文約3,000を含む語彙・作文集であるが、演習用テキストと

して利用した。

- (8)Hearing Marathon Race<ヒアリング・マラソン・レース>:Hearing——聴解能力の改善については、本科のカリキュラム編成上の Audio English の正規の授業とは別に、課外活動として、年間150～200時間の L.L. 利用による聴解訓練を実施した。第2年次以降においても、毎年度各100時間、本学在学中学内計600時間と、学習者の学内外における Voluntary の作業時間、計400時間〈在学中〉を加えて、ヒアリング訓練時間を総計1,000時間を在学中に課すことを検討する。日本人にとって、「話すこと」以上に難事と言われる「聴くこと」の技能の取得に、最大の関心、指導措置と評価の在り方を検討した。Listening Comprehension(聴解技能)の飛躍的伸長——「L.L.カード」の導入。
- (9) 'Let's Speak English' Program (英語学習用16mm映写用白黒フィルム全65巻、大阪在アメリカ文化センター提供)の活用:前述の聴解力の取得と、外国語学習の Motivation の問題として、各巻15分間、ヴァリエティに富んだ編集内容をもつ語学用フィルムを Audio のクラス授業を通じて放映した。

## む す び

外国語としての英語教育の意義とその教授面の方法論について、本稿の執筆者が自ら創意工夫と関心の対象とした事柄は、既述の留意点のほかにも多岐に亘り、本稿のなかで触れることの出来なかった項目あるいは分野を悉く取り挙げることは、適切でないと考える。

それらは、英文法の学習指導面における「形容詞・副詞」、なかでも「副詞」の取り扱い方であり、日本語にその発達のみられない「冠詞と前置詞」の意味・用法についての図解を伴った解説の方法論であり、教授法に関しては16ミリ映写機、ビデオ、トラペン・オーバーヘッド・プロジェクターや語学演習装置(L.L.機器)を専ら利用しての視聴覚教育に対する関心の日常的な具体化であり、また外国語学習の分野においては、日本人学習者にとって最も困難視される「発話・聴解」(Speaking & Listening Comprehension)のオーガニックな、系統的にして簡明な方法論の展開であり、かつまた授業展開の効率性を重視する立場からの、「講義と演習」という二つの要素から成る授業時間の多段階利用についての具体的なプランニングの明示等である。

なかでも Audio 授業の展開において、自主作成の、あるいは自ら編集した多量のカセット・テープを利用した聴解(Listening Comprehension)と英文速読(Fast Reading)の両技能の伸長を意図したテープ・トレーニングの導入は、有限の時間内における多量の音声を伴った速読・速聴・速答の形式を備え、視覚的・聴覚的二重の刺激、遊び感覚がもたらす「興味づけ」(Motivation)と時間省力型の視点を備えた方法論であるために、文字通り「インテンシブ」な、きわめて有効な集中学習理論であると考え。その細部に互っての方法論の展開は、次稿以降において論ずる予定の「通訳技法と、話すこと・聴くことの指導」の中で触れることとしたい。

本稿の執筆者が自らの英語教育に係わる姿勢とフィロゾフィーを伝える空間全体を「授業の演出」と呼称し、教壇は自らの「舞台」であるという位置づけをおこない、教場におけるクラス授業の演技者としての機能を絶えず自覚し、学習活動を媒体としての教授者と学習者との間に呼応すべきソフトな人間関係を通じて、また学習行為のモチベーション

（興味づけ）の方法論に対する第一義的な関心を通じて、自立志向を促し、その結果としての学習者の‘一人学習’の伸長、つまり自己教育力を培う機会を提供する方向での努力を積み重ねてきた。

広義の公教育の場における‘教育’あるいは学習活動に対する伝統的な概念においては、その効果を長期的視野のなかで捉える性格を備え、人間の道徳や倫理の問題を含み、社会的な普遍性を備えた人間の営みであるために、総じて短期的にその効果を期待すべきものではなく、言わば教育における‘生産性’の問題はいわゆる‘馴染まないもの’として世間から、とりわけ教育関係者から退けられてきた嫌いがある。あるいは、普遍的な教育の中立性、人格形成、人間教育の問題と、学習指導面における教育効果の両者が混同され、同次元で捉えられてきた嫌いがある。

結論として、学習目標へ向けての方法論的な全体の枠組みを、学習者より具体的な形として提示することによって、学習目標に対する学習者の‘意識化’を促し、自己教育力の顕現を容易にする、という教授者サイドの立脚すべき「学力保障観」の姿勢が本稿のテーゼである。

## 注

（注1）「Japan: Images and Realities」(日本：そのイメージと現実)

Richard Holloran 著 (Charles E. Tuttle Co. : Publishers)

（注2）後掲の参考文献：「英語テキスト〈中学校・高等学校用〉」

（注3）後掲の参考文献資料〈大学用英語テキストを含む〉：和書・洋書計29点

（注4）後掲の参考文献資料——昭和63年度相愛大学研究論集第4巻：インテンシブ英語試論〔2〕——授業構造を支えるもの——Motivation と自己教育力——（p.117～118）

（注5）後掲の参考文献〈外来語関係〉——「英米外来語の世界」飛田良文編著（南雲堂、1981年10月刊）

（注6）「Language Pollution」James Kirkup（時事英語研究、25-15）

（注7）1991年（平成3年）2月8日（金）の朝日新聞（第1および第4面）は、「外来語の表記」についての国語審議会による正式の答申が初めてなされたことを伝えている。その主旨は、社会生活における外来語の書き表し方についての一定のガイドラインを提示する一方で、社会に定着した慣用を尊重し、広く複数の表記法を是認し、現状の追認と表記法の幅を広げる緩やかな指標となっている。

（注8）後掲の参考文献〈外来語関係〉——「日本の外来語」矢崎源九郎著（岩波新書 C 101 p.3～p.5）

（注9）後掲の参考文献〈外来語関係〉——「外来語辞典」（第二版）荒川惣兵衛著（角川書店、1978年10月）

（注10）「ことば」シリーズ4——‘外来語’（文化庁）昭和51年3月25日 p.65～73〈和製英語と

国際通用語〉(石綿敏雄)

(注11)「人間ざらい」(モリエール作・内藤濯訳)(新潮文庫 332)の作品中に登場する主人公の人物名。

(注12)「西洋故事物語」(河出書房、昭和39年初版)の中に引用されている、ポーランドの作家シェンキヴィッチ著の「クオ・ヴァディス」に登場する古代ローマの貴族ペトロニウスに対して、ローマの詩人ホラティウスが称した言葉。nil admirari(虚無的無感動)の別訳。(p. 55～p. 57)

### 参考文献資料(大学用英語テキストを含む)

- (1)昭和59年度相愛論集第31号拙稿——インテンシブ英語試論〔1〕——日本人と外国語学習——
- (2)昭和63年度相愛大学研究論集第4巻——インテンシブ英語試論〔2〕——授業構造を支えるもの—— Motivation と自己教育力——
- 1) How to Write English (英作文-日本語とのちがいがい)〈羽鳥博愛〉朝日出版社
- 2) HINTS ON JAPANESE-ENGLISH TRANSLATION (HN実用英作文)〈A.J. ハーバート／成田実用英作文〉英宝社
- 3) PRACTICE IN ADVANCED ENGLISH GRAMMAR (高等英文法演習)〈荒木一夫・小西友七共著〉英宝社
- 4) COLLEGE ENGLISH GRAMMAR (新高等英文法)〈小栗敬三著〉泰文堂
- 5) COLLEGE ENGLISH GRAMMAR (大学英文法)改訂版〈荒木一夫著〉新日本教文館・大学社
- 6) A NEW APPROACH TO ENGLISH GRAMMAR (生きた英文法)〈三浦新一〉朝日出版社
- 7) NEW ENGLISH GRAMMAR AND COMPOSITION (新英文法・英作文)〈渡辺一雄〉桐原書店
- 8) An Outline of New English Grammar (新英文法概要)〈堀部・古橋共著〉南雲堂
- 9) Elements of English Grammar (要説英文法)〈稲積・松原共著〉成美堂
- 10) 現代英文法—統語論(現代英文法)〈石川実〉篠崎書林
- 11) 英語語法大事典(石橋幸太郎他)大修館書店
- 12) A PRACTICAL ENGLISH SYNTAX (実用高等英文法)〈小西友七〉英宝社
- 13) MODERN ENGLISH GRAMMAR for COLLEGE STUDENTS (大学生のための現代英文法)〈谷田部庄一〉桐原書店
- 14) The Fundamentals of College English Grammar (大学教養英文法)〈福井・加藤共著〉朝日出版社
- 15) ENGLISH FOR ALL (英語英文法演習)〈上野直蔵〉南雲堂
- 16) 絶対英文法〈成田・清成共著〉研教書院
- 17) A NEW GUIDE TO ENGLISH GRAMMER (英文法解説)〈江川泰一郎〉金子書房
- 18) A NEW ENGLISH GRAMMER SELF-TAUGHT (新自修英文典)〈山崎亭〉研究社
- 19) A NEW COLLEGE ENGLISH GRAMMAR (高等英文法)〈中島・毛利共著〉山口書店
- 20) LIVING ENGLISH STRUCTURE〈W.Stannard Allen〉Longman
- 21) A Practical English Grammar〈A.J.Thomson / A.V.Martinet〉Oxford University Press
- 22) *The Modern Language Teacher's Handbook* by Alan Smallsy and David Morris (Hutchinson)
- 23) *The Classroom and the Language Learner* by Leo van Lier (Longman)

インテンシブ英語試論〔3〕

- 24) *ESSENTIALS OF ENGLISH* (A Practical Grammar-) by Hopper, Gale, Foote & Griffith (Baron's Educational Series, Inc.)
- 25) *English Usage : A guide to first principles* (Routledge & Kegan Paul, GBR)
- 26) *Living English* (Hodder & Stoughton, GBR)
- 27) *Classroom Exercises in General Semantics* (International Society for General Semantics, USA)
- 28) *Growth and Structure of the English Language* (Univ. of Chicago Pr., USA)
- 29) *A Complete Course in Freshman English* (Harper & Row, USA)

英語テキスト〈中学校・高等学校用〉

ENJOY ENGLISH I (New Edition) KYOIKU SHUPPAN  
ENJOY ENGLISH II (New Edition) KYOIKU SHUPPAN  
ENJOY ENGLISH II B (New Edition) KYOIKU SHUPPAN  
New Creative English 1 (revised) DAIICHI GAKUSHUSHA  
New Creative English 2 (revised) DAIICHI GAKUSHUSHA  
CREATIVE Writing Course (revised) DAIICHI GAKUSHUSHA  
NEW HORIZON English Course I TOKYO SHOSEKI  
NEW HORIZON English Course II TOKYO SHOSEKI  
MAINSTREAM II The New Comprehensive English Course ZOSHINDO  
MAINSTREAM II B The New English Reading Course ZOSHINDO  
MAINSTREAM II C The New English Writing Course ZOSHINDO  
そのほかテキスト類18冊。

文献および参考図書

〈外来語関係〉

- 1) 「外来語辞典」(第二版) 荒川惣兵衛著(角川書店、1978年10月)
- 2) 「外来語に学ぶ」 荒川惣兵衛著(新泉社、1980年9月)
- 3) 「英米外来語の世界」 飛田良文編著(南雲堂、1981年10月)
- 4) 「日本の外来語」 矢崎源九郎著(岩波新書 c101、1979年5月)
- 5) 「外国からきた新語辞典」 斎藤栄三郎編(集英社、1961年7月)
- 6) 「外来語の話」 新村出著(教育出版、1976年6月)
- 7) 「外来語ものしり百科」 久世善男著(新人物往来社、1978年6月)
- 8) 「ことば」シリーズ4 '外来語'(文化庁、1983年3月)
- 9) 「外来語の小辞典」〈現代用語の基礎知識〉(自由国民社、1986年版)